

富山県福光町

## 梅原胡摩堂遺跡Ⅱ

1998年3月

福光町教育委員会



15 地区全景（南から）

## 序

福光町の東部に位置する北山田地区は山田川と大井川にはさまれた水田地帯であります。東海北陸自動車道関連の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業（梅原地区）の実施に伴う梅原胡摩堂遺跡の発掘調査です。遺跡の大半は盛土により保存することになりましたが、権現堂川改修部分及び用排水路用地の一部について本調査を実施しました。

調査の結果、鎌倉時代から戦国時代にかけての掘立柱建物、土坑、井戸、堀とみられる大溝を検出し、それらに伴って、土師器、珠洲焼、青磁、白磁などの遺物が出土しました。本書は、その調査結果をまとめたものです。郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

終りに、この調査の実施にあたり、富山県埋蔵文化財センター・福光町シルバー人材センター・富山県農林水産部・ほ場整備事業梅原地区委員会を始め、地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに、深く感謝を申し上げます。

平成10年3月

福光町教育委員会

教育長 石崎栄一

## 例　　言

- 1 本書は、県営低コスト化水田農業大区画整備事業（梅原地区）に伴う富山県福光町梅原胡摩堂遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成9年5月13日から同年12月9日までである。調査面積はあわせて3,415 m<sup>2</sup>である。
- 2 調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。地元負担金については、福光町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。
- 3 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、文化係長加藤仁が調査事務を担当し、生涯学習課長西村勝三が総括した。調査担当及び本書の執筆は生涯学習課主事佐藤聖子が行った。
- 4 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。  
安念 幹倫・池野 正男・上野 章・大平奈央子・久々 忠義・塩田 明弘・高梨 清志  
太嶋 勇・林 敏三・宮崎順一郎・宮田 進一・吉田 敏信 (敬称略・五十音順)
- 5 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著 1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。
- 6 調査参加者は次のとおりである。  
石原 勇・井口富士雄・井口 義雄・大井川安太郎・奥野 豊次・棚田 俊雄・棚田 正男  
中村 俊雄・山田 善之・吉田 清三・荒井 とよ・井口 鮎子・井口よし子・大井川あや子  
大井川花枝・大島 笑子・尾川 澄子・片田 敏子・川島 芳江・大門 そと・橋本 華子  
溝口 秋子・溝口あさ子・水口 淑子・山田きみ子・山道 文子(現地作業員)・小嶋 鮎子  
戸籠 暢宏・中島 和哉・中野 秀昭・西村 健子・佐々木亮二・真井田宏彰(現地測量補助)  
西川 和美・安田 富子・山村 恵子・近藤 美紀・中谷 正和・宿野 隆史  
三浦 英俊(遺物整理作業)

## 目　　次

I 位置と環境 .....	1	参考文献 .....	10
第1図 位置と周辺の遺跡 .....	1	第5図 梅原胡摩堂遺跡15・16地区の地形と区割	11・12
II 調査に至る経過 .....	2	第6図～第9図 15地区の遺構(1)～(4)	13～16
第1表 遺跡の概要 .....	2	第10図 15地区の遺構(5)・16地区の遺構	*c 17
第2図 遺跡の範囲と調査区位置図	3	第11図～第16図 15地区の遺物(1)～(6)	18～23
III 調査の概要 .....	4	第17図 15地区の遺物(7)・16地区の遺物	*c 24
1. 調査の経過 .....	4	図版1～図版6 15地区の遺構(1)～(6)	
2. 調査の方法 .....	4	図版7 16地区の遺構	
3. 15地区的概要 .....	4	図版8～図版15 15地区出土遺物(1)～(8)	
第3図 15地区的基本層序 .....	4	図版16 16地区出土遺物	
4. 16地区的概要 .....	9	報告書抄録	
IV まとめ .....	10	付図1 梅原胡摩堂遺跡15地区・遺構配置図(1)	
第4図 関連構造配置図 .....	10	付図2 梅原胡摩堂遺跡15地区・遺構配置図(2)	
		付図3 梅原胡摩堂遺跡16地区・遺構配置図	

## I 位置と環境

富山県福光町は、石川県との県境をなす富山県の南西部端に位置し、県境には、養老三年（719年）、泰澄大師によって開山されたといわれる医王山をはじめとするなだらかな山脈が連なる。上平村と接する南側に位置する大門山に源を発する小矢部川が、町の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、町の東北部から北に向かって広がる砺波平野を形成している。

梅原胡摩堂遺跡は、町北東部の梅原地内、小矢部川の支流である大井川と山田川に挟まれた河岸段丘上に位置する。一帯の標高は、70m前後を測る。梅原地内には、胡摩堂遺跡の他に梅原安丸・梅原出村・梅原上村・梅原落戸・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡が密集しており（第1図参照）、縄文時代から近世までつづく梅原遺跡群を形成している。梅原安丸・梅原加賀坊・田尻・久戸の各遺跡は、東海北陸自動車道を建設する際発掘調査が行われ、12世紀中頃から18世紀にかけての大集落跡が発見された〔富文振1994〕。この南後方にには、うずら山・宗守・竹林I・竹林II・東殿・徳成などの縄文時代を中心とした遺跡が存在する。また、梅原胡摩堂遺跡6・7地区からは弥生時代中期の土器・管玉・石錐が出土し、梅原安丸Ⅲ遺跡では古墳時代の堅穴住居跡1棟を検出しており〔福光教委1991・1994〕、原始時代から今日まで連續と人々が生活していたことがわかる。

文献資料では、古代には福光町の一部が砺波川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村と呼ばれ官倉が置かれていたことが知られる。11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。15世紀には、梅原地内に瑞泉寺の分家である梅原坊があった。



第1図 位置と周辺の遺跡

1. 梅原安丸遺跡
2. 梅原安丸Ⅱ遺跡
3. 梅原安丸Ⅲ遺跡
4. 梅原安丸Ⅳ遺跡
5. 梅原安丸Ⅴ遺跡
6. 梅原出村Ⅱ遺跡
7. 梅原出村Ⅲ遺跡
8. 梅原上村遺跡
9. 梅原落戸遺跡
10. 梅原加賀坊遺跡
11. 梅原胡摩堂遺跡
12. 田尻遺跡
13. 久戸遺跡
14. 宗守遺跡
15. 神守城跡
16. うずら山遺跡
17. 久戸東遺跡
18. 田屋川古戰場
19. 田中遺跡
20. 仏道寺跡
21. 遊部城跡
22. 常楽寺跡

## II 調査に至る経過

平成元年、21世紀に向けての大型農業に対応するため、遺跡の所在する梅原地区において『低コスト化水田農業大区画は整備事業計画』が策定された。この事業は平成2~9年度を事業年度とし、梅原地区93haを対象とする計画であった。しかし、この計画地内を南北に縦断する東海北陸自動車道の建設に伴い、遺跡の発掘調査がすでに実施されており、計画地内においても遺跡の広がりが予想された。そのため、町教育委員会は県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、平成元年度に計画地内の20haで、2年度には残りの73haで遺跡分布調査を実施し、広範囲において遺物の散布地を確認した。さらに2年度には、国庫補助を受けての試掘調査を実施し、遺跡の範囲確認を行ったところ、遺構の依存状況が良好であった事から、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ねた結果、遺跡の大半は盛土を行なう事で水田下に保存し、一部の面工事・農道・用排水路部分について発掘本調査を実施する事となった。以降、毎年度試掘調査と本調査を継続して実施しており、試掘調査については平成7年度で調査を完了した〔福光教委1991・1992・1993・1994・1995・1996・1997〕。

これまでの調査面積は次のとおりであり、遺跡の内容は第1表のとおりである。

試掘調査対象面積		本調査対象面積	本調査対象遺跡
平成2年度	約164,000m <sup>2</sup>	2,186m <sup>2</sup>	梅原安丸Ⅱ遺跡・梅原安丸Ⅲ遺跡・梅原安丸Ⅳ遺跡・梅原安丸V遺跡
平成3年度	約124,500m <sup>2</sup>	5,238m <sup>2</sup>	梅原安丸遺跡・梅原安丸Ⅱ遺跡・梅原安丸Ⅲ遺跡
平成4年度	約145,000m <sup>2</sup>	4,700m <sup>2</sup>	梅原上村遺跡・梅原出村Ⅱ遺跡・梅原出村Ⅲ遺跡
平成5年度	約116,000m <sup>2</sup>	3,900m <sup>2</sup>	梅原落戸遺跡・梅原出村Ⅲ遺跡・梅原上村遺跡
平成6年度	約130,000m <sup>2</sup>	3,450m <sup>2</sup>	梅原落戸遺跡
平成7年度	約110,000m <sup>2</sup>	3,235m <sup>2</sup>	梅原落戸遺跡
平成8年度		4,590m <sup>2</sup>	梅原加賀坊遺跡・梅原胡摩堂遺跡・梅原落戸遺跡・梅原安丸V遺跡

第1表 遺跡の概要 (NO. は第1図の遺跡番号と対応する)

No.	遺跡名	所在時代	発見された遺構	発見された遺物
1	梅原安丸	縄文・中世・近世	掘立柱建物柱穴、井戸	十脚質十脚、漆器、伝承器、漆器、白石、下駄
2	梅原安丸Ⅱ	縄文(後期)・古代・中世・近世	掘立柱建物、同柱・井戸、土器僅なり	縄文十脚・石器、瓦器、傳承器、土器質土器、漆器、陶器器
3	梅原安丸Ⅲ	縄文(後期)・古墳・古代・中世・近世	竪穴式住居(古墳)・竪穴式住居物、柱穴、火、漆、井戸	縄文土器・石器、消土器、土器傳土器、麻糸、陶器器
4	梅原安丸Ⅳ	縄文か・古代・中世・近世	掘立柱建物柱穴、井戸、窓、盤六枚遣邊・井戸	縄文十脚、無窓器、土器質土器、碗形、陶器器
5	梅原安丸V	縄文か・古代・中世・近世	掘立柱建物、竪穴式住居柱穴、火、漆、井戸	縄文十脚、打石石糸、漆器、中央土器類、深丸、越前、青磁、白磁、川跡、漆器、土器質土器、陶器器、土器、漆器、朱器、山形瓦祝、鼎・具
6	梅原出村Ⅱ	縄文(後期)・古代・中世	柱穴、火、漆	縄文土器・石器、消土器、土器傳土器、珠形、羽輪、網掛キセル
7	梅原出村Ⅲ	縄文・古墳・古代~中世・近世・近代・现代	竪穴式住居、柱穴、火、漆、井戸、漆物包含層(縄文)	縄文十脚・石器、瓦器器、土器質土器、珠形、羽輪、網掛キセル
8	梅原上村	縄文・古代~中世・近世	柱穴、火、漆、漆物包含層(古代)	縄文土器・石器、瓦器器、土器質土器、劍首
9	梅原落戸	縄文・茶牛・古代・中世・近世	川、火、漆物包含層(茶牛)、掘立柱建物・古倉庫、土器(古代)・古往社物、堆・土坑、漆(中世)・漆(近世~近代)・柱穴	縄文土器・石器、消土器、土器傳土器、漆器、瓦器器、木製品、敷土土器、火鉢、羽口、小石、飲食・保貨(中世)
10	梅原加賀坊	縄文・古代・中世・近世	渠、土坑	縄文土器、羽器、土器傳土器、土器質土器、漆器、陶器器
11	梅原胡摩堂	縄文・茶牛・古代・中世・近世	墓跡、掘立柱建物、漆、塗、盤穴、井戸	縄文土器、打製石斧、土器傳土器、瓦器器、中世土器、漆器、青磁、白磁、輪形、織物痕、漆器、漆器、白石



第2図 遺跡の範囲と調査区位置図(1万分の1)

### III 調査の概要

#### 1. 調査の経過(第2図)

梅原胡摩堂遺跡は、東海北陸自動車道の建設に伴い昭和57年に県埋蔵文化財センターが行った分 布調査で発見された。昭和63年には、自動車道路線部分にて県埋蔵文化財センターが試掘調査を行 い、平成元年から同4年まで財團法人宮山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所が本調査を実施して いる。

ほ場整備事業に伴う胡摩堂遺跡の調査は、県埋蔵文化財センターの応援を受け町教育委員会が担当 している。平成7年には、自動車道東側87.6haにて試掘調査を行った。翌8年度には、遺跡中央西寄り の11地区と中央東寄りの13地区の2ヶ所で本調査を実施。11地区は用排水路付け替え工事で1,035 m<sup>2</sup>、13地区は田面削平工事で487 m<sup>2</sup>を発掘した。また、胡摩堂遺跡中央部分を東西に通過する県営 農道山中・梅原線整備・拡幅にともない、5年度から8年度にかけては合計3,470 m<sup>2</sup>で本調査を実施 した。

9年度調査については、次のとおりである。本遺跡内には、遺跡東側部分を南北に流れる権現堂川 が存在するが、現はほ場整備事業に伴い、現在の流れを塚本オ一氏宅背戸付近から西に向かわせ、約 100m離れた東海北陸自動車道東側の側道に沿わせる事となった。そのため、川の新規着工部分、川 に伴う側溝部分にて本調査を実施することになり、この権現堂川関連部分を15地区とした。このほ かに、15地区から南側に約100m、用排水路付け替え部分においても、本調査を実施することとなっ たため、これを16地区とした。調査面積は、15地区が3,260 m<sup>2</sup>、16地区が155 m<sup>2</sup>である。

#### 2. 調査方法

調査は、まず重機により耕作土の掘削を行った。その後、地区ごとに基準杭の設置及び調査区割を行った。調査区割は、調査区の形に応じておおむね南から北方向にX軸、西から東方向にY軸をとり、それぞれ2mを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層の掘削・遺構検出・遺構掘削等は人力で行い、遺構平面図の作成は、ラジコンヘリコプター により撮影した写真から図化した。

#### 3. 15地区的概要

##### (1) 地形と層序(第3・5図)

15地区は、川の新規着工部分幅6mと、東側に間 6mを隔てて便溝水路部分幅1m部分が、遺跡北側 から中央部分に向けて東海北陸自動車道に沿って約 400m南下し、その地点から川の着工部分のみ90度東 向けて約100mのびでいる調査区である。地形は、南 側から北側に向かって緩やかに下っており、標高は、 南側の高い所で約74.60m、北側の低い所で約71.50m である。

地表から地山面までの深さは平均約40cmである。

その間は大きく4層に分かれる。①層は現代の耕作土、②層は黒褐色土で中世の遺物が含まれる。 ③層は黒色土で古代の遺物が含まれる。④層は黒褐色土で縄文時代の遺物が含まれ、地山層は黄色 土である。ただ、梅原地区では昭和30年代に一度はほ場整備を行っているため、削平を受け①層→ ②層→地山の順に堆積している箇所や、①層と②層の間に厚く盛土をした箇所などがあり、その層序 と地山面までの深さは様々である。

①層 現代の耕作土
②層 黒褐色土（中世）
③層 黒色土（古代）
④層 黒褐色土（縄文）

第3図 15地区的基本層序

(2) 遺構（第4・6～10図・図版1～6・付図1・2）

縄文時代の土坑1、奈良・平安時代の溝2、畠跡2、ピット1、中世の掘立柱建物跡7、土坑38、井戸4、溝52、ピット群がある。

A. 縄文時代

P432

X86、Y3付近に位置する。長辺1.1m、短辺90cm、深さ約25cmの楕円形を呈している。検出面は、周辺の中世遺構とほとんど区別がつかなかった。埋土は炭混じり黒褐色土であり、単層である。縄文時代晩期下野式に相当する深鉢が出土している。この遺構のほかには、縄文の遺構は確認していないが、X8、Y34付近で晩期にあたる深鉢が、縄文の包含層より2個体分、完形品に近い形で出土している。

B. 奈良・平安時代

SD47・48

調査区のうち東西にのびた部分の中央部分に位置する。南東から北西へと流れているようである。SD47が幅約1m、深さ約40cm、48が幅約1.3m、深さ約40cmである。48は47を切っている。48の埋土は黒色土が上層に、黒色砂礫土が下層に位置する。土師器・壺・須恵器・杯が出上しており、遺物から8世紀に比定できる。

SF01・02

北に対して約25度東へ振るSF01、北に対して約40度西へ振るSF02がある。SF01が02を切っている。ひとつの溝の幅は約40cm、深さは10～15cmで、3m間隔で並んでいる。埋土は、黒褐色土である。遺物は出土していないが、昨年度調査の13地区で検出した畠跡と埋土や、軸方向が類似しているため、同時期古代の遺構と考えられる。

C. 中世

掘立柱建物・SB01

調査区北側に位置する。北東部分が調査区外にあたるため、全容は分からぬが、南北7間×東西2間以上の総柱建物である。棟方向は北に対して約22度東へ振れる。床面積は75m<sup>2</sup>以上になるとみられる。柱穴の掘方は40cm大の円形で、深さは40～50cmである。埋土は黒褐色土質に黄色土が混じったもので、15～20cmの太さの柱を使っていたと考えられる。P3から完形に近い土師器皿が出土していることから、時期は12世紀後半から13世紀とみられる。

SB02

SB01と重なりがあり、01に切られている。東側部分が調査区外にあたるため、これも全容は分からぬ。南北4間×東西2間以上の総柱建物である。棟方向は、北に対して約12度東へ振れる。床面積38m<sup>2</sup>以上の建物になるとみられる。柱穴の掘方は50～60cmの楕円形を呈しており、深さは40～50cmである。埋土は黒褐色土でSB01と比べると、黄色土の混じりが少ない。SB01・P4は01、02重複して使用している可能性がある。出土遺物はないが、12世紀後半とみられる。

SB04

調査区中央に位置する。南北2間×東西1間以上か。棟方向は北に対して約10度東へ振れる。床面積は、11m<sup>2</sup>以上になる。柱穴の掘方は40cmで、深さは約50cmである。東側の柱穴P1・3・5はSD19に切られている。詳しい時期は不明である。

SB05・06

調査区が東に90度曲がる部分の北側に位置する。ともに北東部分が調査区外にのびている。SB05は、南北5間×東西2間以上、棟方向は北に対して東に16度振れる。06は南北6間×東西2間以上、棟方向が北に対して東に18度振れる。柱穴の掘方は05が40cm、06が50cmである。深さがともに10～30cmとやや浅い。以前のは場整備によって、上面が削平されている可能性が

高い。出土遺物はないが、西側に平行するSD24と埋土がにていること（黒色土）、SD24の上面より出土している土師器皿より時期は15世紀後半とみられる。

#### SB07

調査区東側に位置する。南側が調査区外にのびている。南北3間×東西2間以上、棟方向は、北に對して25度西に振れる。掘方は約30cmの円形で、深さは15~20cmと浅い。北側部分が大幅に削平されたと考えられる。埋土はやや粘質の黒褐色土である。出土遺物はなく、時期不明である。

#### 土坑・SK04・05・07

一边の長さが2m弱の方形に近い形をした土坑が、調査区北寄りに位置する。SK07はX151、Y2.5付近に位置し、SK04は07の南約5m部分に、SK05は04の西約3m部分に位置する。SK04は南北1.6m×東西1.5m、深さ50cm、05は南北1.9m×東西1.6m、深さ30cm、07は南北1.7m、深さ60cm、東側が遺跡外にのびるため、東西方向の長さはわからない。SK04・05の壁面はやや直立ぎみで、埋土は黒褐色土である。07の壁面はもろく、埋土は小石混じりの黒色土である。出土遺物は、SK07より土師器皿が縦方向に2枚落ち込んだ状態で出土したのみである。時期は13世紀前半とみられる。

#### SK06

調査区北側西角、SB01の西側約3m部分に位置する。遺構の大部分が調査区外にあるため、おそらく全体の4分の1しか検出できていないのではないだろうか。深さは約80cmで、底面から肩への立ち上がりはゆるやかである。遺物は、2層目の黒色粘質土、最下層の黒褐色粘質土（ともに炭、焼土を含んでいる）から、大量に出土している。土師器皿、珠洲、青磁、白磁があり、時期は12世紀後半に比定できる。

#### SK10

X115、Y3付近に位置する。SD03の東側約3m、SD09の北側約4m部分にあたる。南北方向2.9m×東西方向1.5mの長方形で、深さ約40cmである。壁面は直立しており、埋土の黒褐色土はかたくしまっている。出土遺物はないが、その形態から木管墓であった可能性もある。詳しい時期は不明である。

#### SK11

X163付近に位置する。南北方向3.7m×東西方向5.6mを計るが、西側は調査区外にのびるようである。深さは、約20cmと浅い。埋土は黒褐色土で、底面の地山面は礫混じり黄褐色土である、出土遺物には、土師器、炭、フイゴの羽口がある。時期は不明であるが、作業場的役割を果たしていた可能性がある。

#### SK19

X61~66付近に位置する。南北方向10.7m×東西方向5m以上の大型土坑で、東側が調査区外にのびている。側溝水路部分で検出したSK32はこの土坑の延長とみられる。深さは、20~70cmで、検出面から30~40cmのところで、石が敷き詰められていた。埋土は炭混じりの黒色土が大半を占める。出土遺物には、土師器、珠洲、青磁、瀬戸美濃がある。時期は15世紀に比定できる。

#### SK21

X52、Y2付近に位置する。直径1.1mの円形に近い形で、深さ約30cmである。埋土は、黒褐色土である。土師器皿、瀬戸の御皿が底面近くから出土した。時期は15世紀後半と考えられる。

#### 井戸・SE02

X57、Y2付近に位置する。直径約1mの円形で、深さは約2.2mになる。礫混じり黄褐色土（地山）に掘り込んでいる素掘りの井戸である。埋土は、小石混じりの黒褐色粘質土である。出土遺物には、土師器・皿、珠洲・すり鉢、青磁・椀底部がある。時期は15世紀前半とみられる。

#### 溝・SD01・02

X88~106付近を南北に縦断する。SD01は幅2.6m、深さ1.2m、断面形がすり鉢状を呈している。02は幅1.7m、深さ50cmで、断面形は逆台形状である。SD01は財団調査で検出されたSD2451の続き、

02はSD2450の続きにあたる。この2つの溝は、ともに調査区外東側へとのびる。SD01は側溝水路部分で検出したSD35へと続き、西に屈曲した後、さらにSD11Bへと続く。SD02は、さらに調査区外の北東へとのびるようである。遺物は、SD02からのみ出土した。土師器皿、珠洲、白磁がある。時期はともに13世紀から14世紀にかけてである。

#### SD03

X114～132の間を、南北に継断する。幅約2.2m、深さ70cm～1mである。流れは南から北へと向かっていたようである。この溝は、財団調査SD1418の続きにあたる。流れの方向をやや東に振りながら、X131付近で90度西に曲がり調査区外へとのび、同じく財団調査のSD1406へとつながり、区画溝を形成している。埋土には、中央部分に黒色の湿った土があり、その土層から土師器、珠洲などが大量に出土した。そのほかの出土遺物には、青磁、白磁、越前などがある。時期は13世紀に比定できる。

#### SD04

SD03の北側に位置する。幅約16m、深さ1.3mである。財団調査SD702、自然流路に対応する。2層めのややしまりのある黒褐色土から大量に遺物が出土している。出土遺物には、須恵器、中世土師器皿、珠洲、青磁、白磁、瀬戸美濃、越前、越中瀬戸がある。時期は12世紀後半から13世紀に比定できる。

#### SD09・10・11

X106～111付近を東西方向に3溝平行に横断している。北側から、SD09、10、11の順に並んでいる。それぞれ財団調査のSD1250、2203、2453と対応している。SD09、10は東がわ側溝水路部分で検出したSD33、34へと続き、さらに東へとのびるようである。出土遺物には、SD09より土師器、珠洲、越前、青磁、白磁、越前、瀬戸美濃、伊万里、唐津が、SD10より土師器、珠洲がある。時期は、SD10、09、11の順に新しくなり12世紀後半から14世紀にかけてである。

#### SD23

X48～51の間に位置する。財団調査のSD2203と対応することから、前述のSD10と同一のものとみられる。SD10、SD2203、SD23で今回の調査区東側に大区画を形成しているとみられる。出土遺物には、古代土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、青磁、瀬戸美濃がある。

#### SD25・41・42

X31～37、Y3～7付近に位置する。幅約1.7m、深さ30～70cmである。埋土は、やや粘質の黒色土である。SD25が90度に屈曲する部分にあたり、北側にSD41が、東側に42が続く区画溝とみられる。出土遺物は、SD41より土師器、珠洲が出土している。時期は14世紀前半とみられる。

### (3) 遺物(第11～17図・図版8～16)

縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世のものがある。

#### A. 縄文時代

縄文土器(1～4)がある。1はP432出土の深鉢口縁部破片で、晚期下野式平行である。2は、外面に縦に沈線を施す。3は、条痕を外面に施した深鉢口縁部破片である。4は、外面口縁部直下に2条の沈線を施す。

#### B. 奈良・平安時代

##### SD47(5～7)

5は土師器壺・口縁部である。6・7は須恵器杯である。時期は8世紀である。

##### SD48(8～12)

8・9は、土師器壺・口縁部、10・11・12は須恵器杯蓋である。時期は9世紀である。

### 包含層（14～20）

14・15・16は須恵器皿である。17・18・19は須恵器蓋である。20は、須恵器甕である。

## C. 中世

### SB01・P3 (21)

ロクロ土師器皿である。体部は直線的に開き、口縁端部は丸く、低い高台がつく。12世紀後半にあたる。

### SK06 (22～39)

22～25は、ロクロ土師器皿、26～32は非ロクロ土師器皿である。22は、口縁下に段がつく。25は高い柱状高台がつく。26・28・29・30は2段ナデで、口縁端部が丸く、器壁が厚い。32は短い口縁部が直立し底部が平たい。12世紀後半から13世紀初頭に位置づけられる。33～37は白磁である。

38・39は珠洲である。

### SK07 (40・41)

40・41とも非ロクロ土師器皿である。13世紀前半に位置づけられる。

### SK11 (42)

フイゴの羽口である。

### SK19 (43～53)

43～46は上師器皿である。47～51は珠洲である。52は青磁、53は瀬戸である。

### SK21 (54・55・57)

54はロクロ土師器皿である。55は珠洲・すり鉢、57は瀬戸美濃卸皿である。

### SK25 (56)

56は青磁・椀である。

### SK32 (58)

58は瓦器・火鉢である。

### SE01 (59・60)・02 (61～64)

59・60ともに上師器である。61はロクロ土師器皿、62は非ロクロ土師器皿である。63は珠洲・すり鉢、64は白磁・椀底部である。

### SD02 (65～67)

65は非ロクロ土師器皿、66は白磁・椀底部、67は珠洲・すり鉢である。

### SD03 (68～89)

68・69はロクロ土師器皿、70～74は非ロクロ土師器皿である。75～80は珠洲である。

81～85は白磁、86～89は青磁である。

### SD04 (90～104)

90～94は非ロクロ土師器皿である。95～97は珠洲、甕の口縁部と鉢である。

99・100は白磁、101～102は青磁、104は越中瀬戸である。

### SD09 (105～118)

105～110は非ロクロ土師器皿である。111・113・114は珠洲である。112は越前である。

117・118は青磁である。

### SD10・11 (119～125)

119・120・122・124は土師器皿である。123は青磁、121・125は珠洲である。

### SD23 (126～134)

126は非ロクロ土師器皿である。127・128は瀬戸美濃、129は越中瀬戸・すり鉢である。

130～132は珠洲、134は白磁、133は瓦器・火鉢である。

**SD24 (135・136)**

ともに非クロ土師器皿である。

**SD39・40・41 (137~143)**

137は青磁、139・141・142は非クロ土師器皿である。143は珠洲である。

**P347・P382 (144・146)**

144は土師器皿である。145は青磁である。

**包含層 (147~171)**

147~152は土師器、153~156は珠洲である。157・158・161は白磁、159・160・163は青磁である。162は青白磁・合子である。164・165・167は瀬戸、169は八尾・壺である。170は越中瀬戸・皿、171は越中瀬戸・すり鉢である。

#### 4. 16地区の概要

(1) 地形と層序 (第5図)

16地区は、遺跡中央東寄りに位置する。用排水路設置部分で、1m幅のものが南北に75mのびた後、90度東にふって東西に80mのびている。標高は約75.50mで、15地区同様、地形は南から北に向かって緩やかに下っている。

上層は、①現代の耕作土、②黒褐色土—中世の包含層、③黄色土—地山の順に堆積する。

(2) 遺構 (第10図・付図3)

中世の土坑、井戸、溝がある。

**SK01**

東西方向の調査区中央部分に位置する。SK01は、東西方向1.8m×南北方向1.5m、深さ60cmである。埋土は、黒色粘質土である。出土遺物には、土師器、珠洲がある。時期は16世紀に比定できる。

**SE01**

調査区東端に位置する。直径約1mの円形で、深さは約1.2mの素掘りの井戸である。埋土は黒褐色粘質土である。出土遺物には、土師器、青磁がある。時期は15世紀後半から16世紀前半に比定できる。

**SD01・02・03**

東西方向の調査区中央部に位置する。SD02は旧橋本川にあたる。SD03は、7年度町教育委員会調査のSD06Bと対応する。SD01からは、土師器皿、越前が、02からは越前、唐津が出土している。SD01・03は16世紀前半に位置付けられる。

(3) 遺 物

古代、中世、近世の遺物が出土した。

**A. 奈良・平安時代**

172・173は土師器・壺口縁部である。174は須恵器・杯底部である。時期は9世紀前半である。

**B. 中 世**

**SE01・02 (175~179)**

175・176・178は土師器・皿である。177は青磁、179は珠洲・すり鉢である。

**SD01・02 (180~184)**

180は土師器、181、182は越前・壺の口縁部、183・184は唐津である。

**SD05 (185~188)**

185・186は土師器である。187は188は土師質土器・すり鉢の底部である。

**SD06 (189・190)**

189は土師器・灯明皿である。口縁部にタールが付着している。190は珠洲・すり鉢である。

**SD13 (191)**

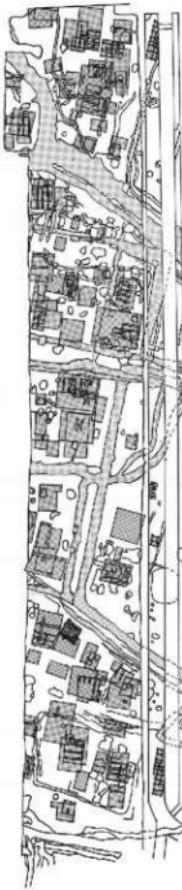
青磁の椀である。

**包含層 (192・193)**

ともに越中瀬戸である。192は小壺、193は大皿である。

## IV まとめ

- 15地区は、東海北陸自動車道関連の財団調査と同様、12世紀後半から13世紀主体の北側から15世紀主体の南側に向かって、集落の中心が移動していることがわかった。また、東西方向にのびた調査部分では、中世以降の遺構は少なく、12世紀以前の遺構が主体となっていること、近年の分布調査、試掘調査の結果から胡摩堂遺跡東側は、12世紀以前、古代が主体となる可能性が高い。
- 16地区は、周辺の以前の調査からも16世紀前半主体といえる。瀬戸美濃・天目茶碗や青磁の椀の出土から、寺内町関連の遺構と考えられる。



第4図 遺構関連図

## 参考文献

桂書房 1997『中・近世の北陸』

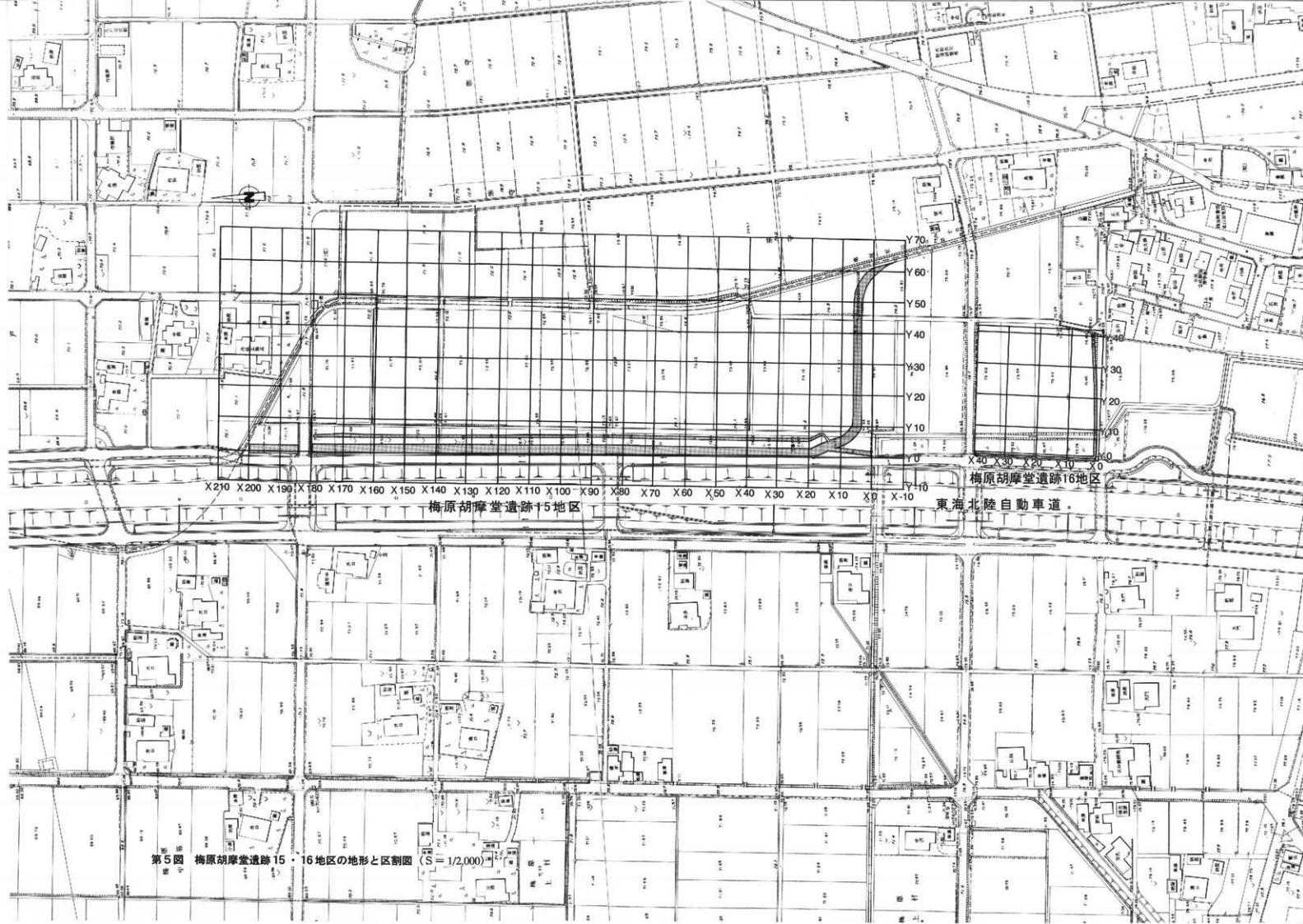
財団法人 富山県文化振興財團 1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺構編)』

財団法人 富山県文化振興財團 1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』

福光町教育委員会 1996『富山県福光町梅原胡摩堂遺跡群III』

福光町教育委員会 1997『富山県福光町梅原加賀坊遺跡・梅原胡摩堂遺跡群I・梅原落戸遺跡群IV』

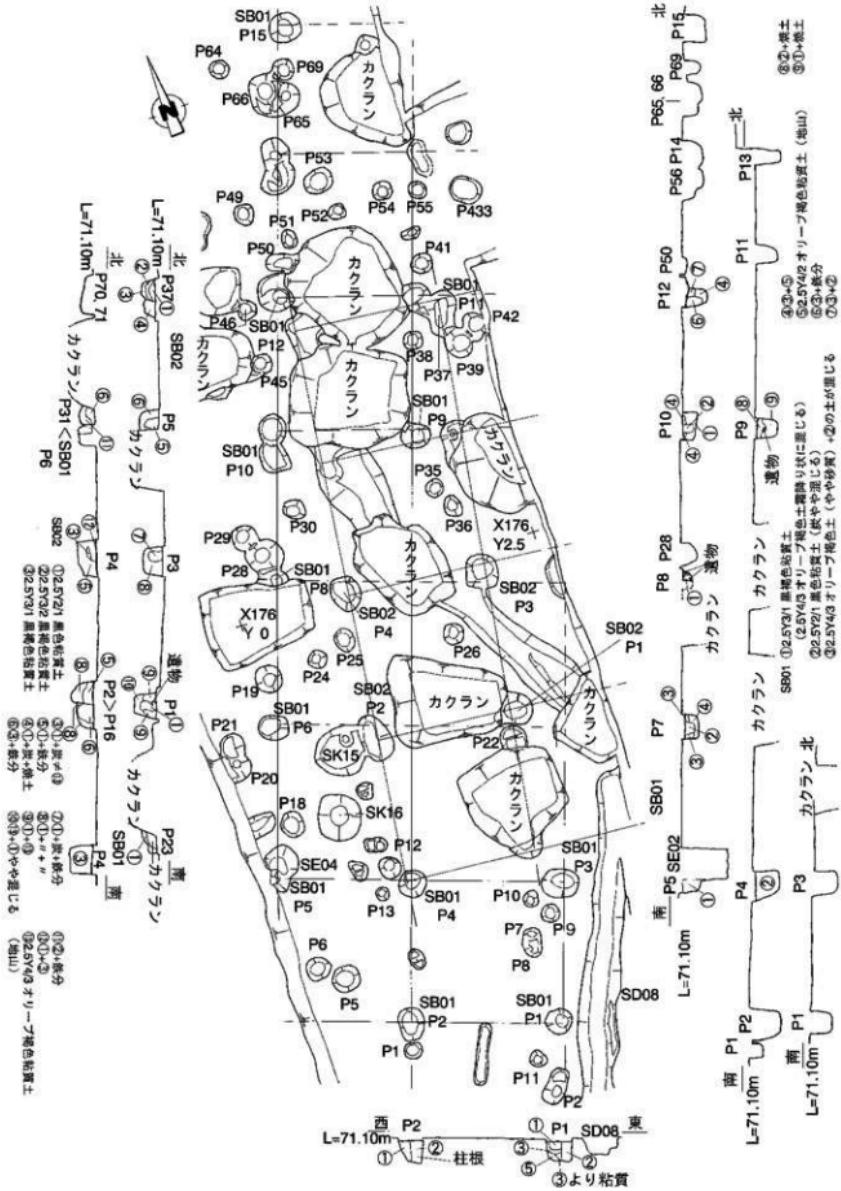
・梅原安丸遺跡群群III』



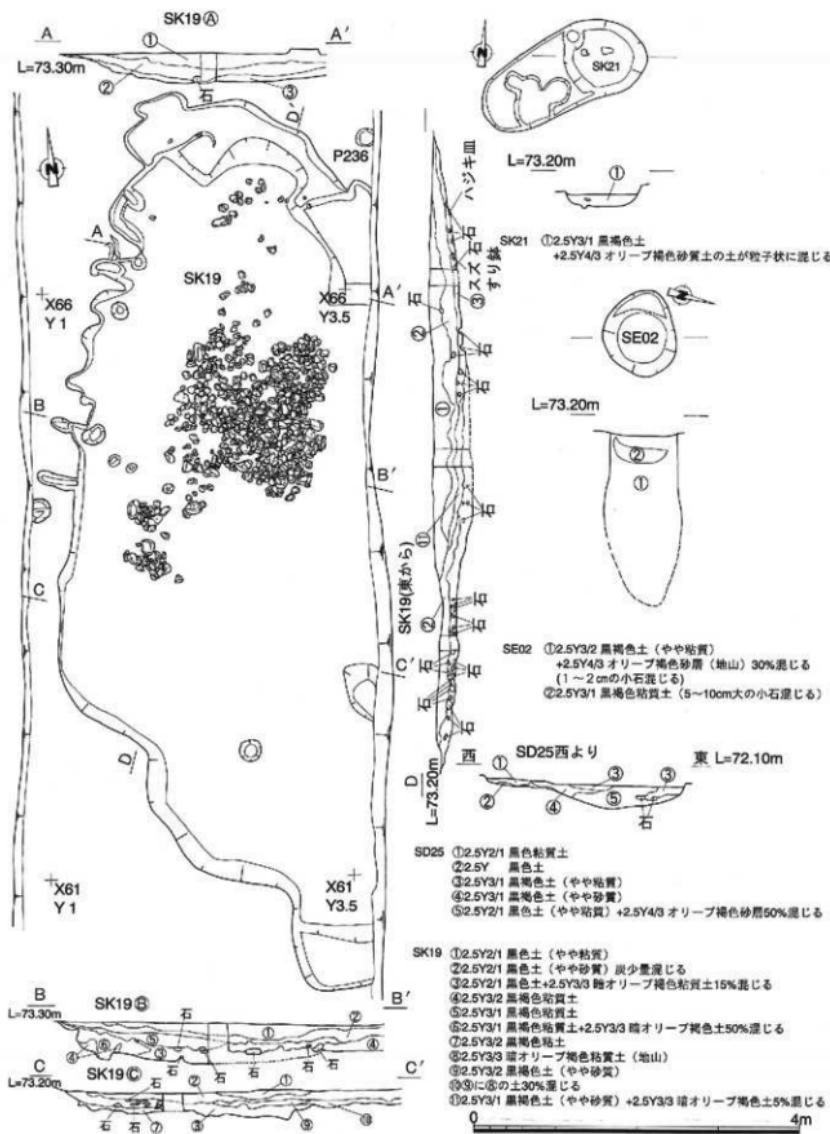
第5図 梅原胡摩堂遺跡15・16地区の地形と区割図



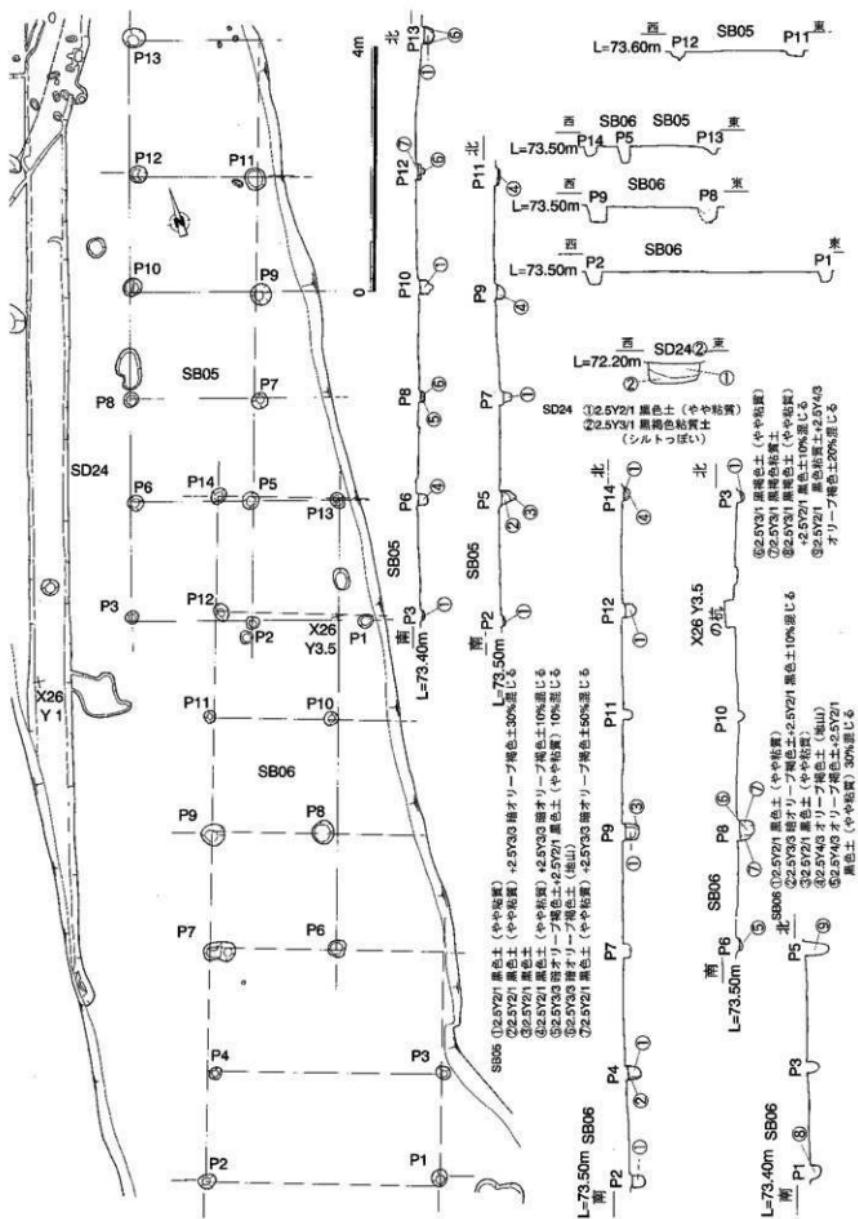
第6図 15地区の遺構(1) (1:60, SD29は1:80)



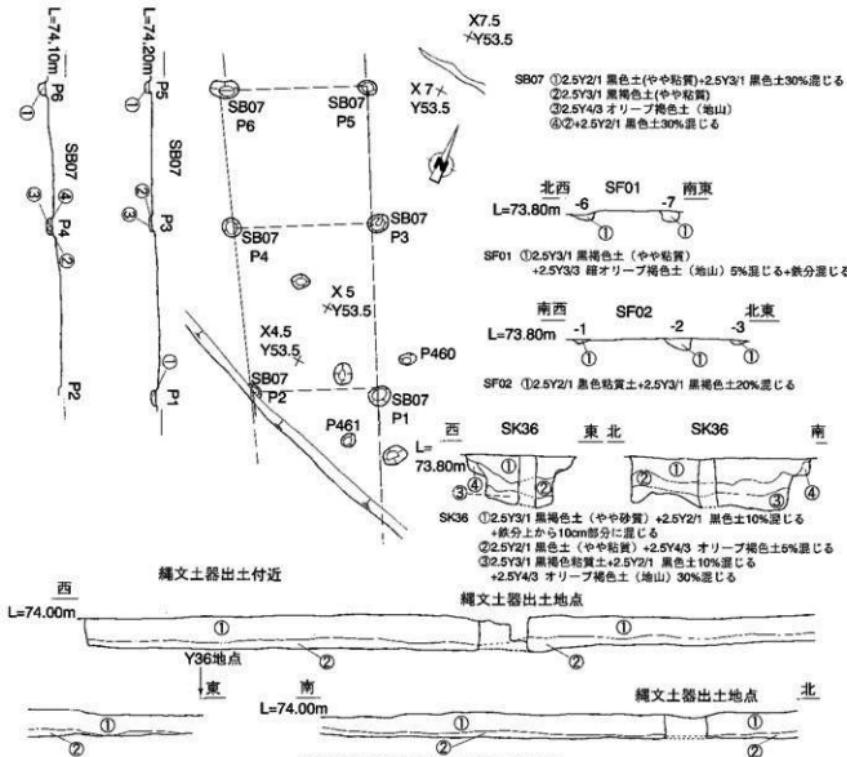
第7図 15地区の遺構(2) (1:80)



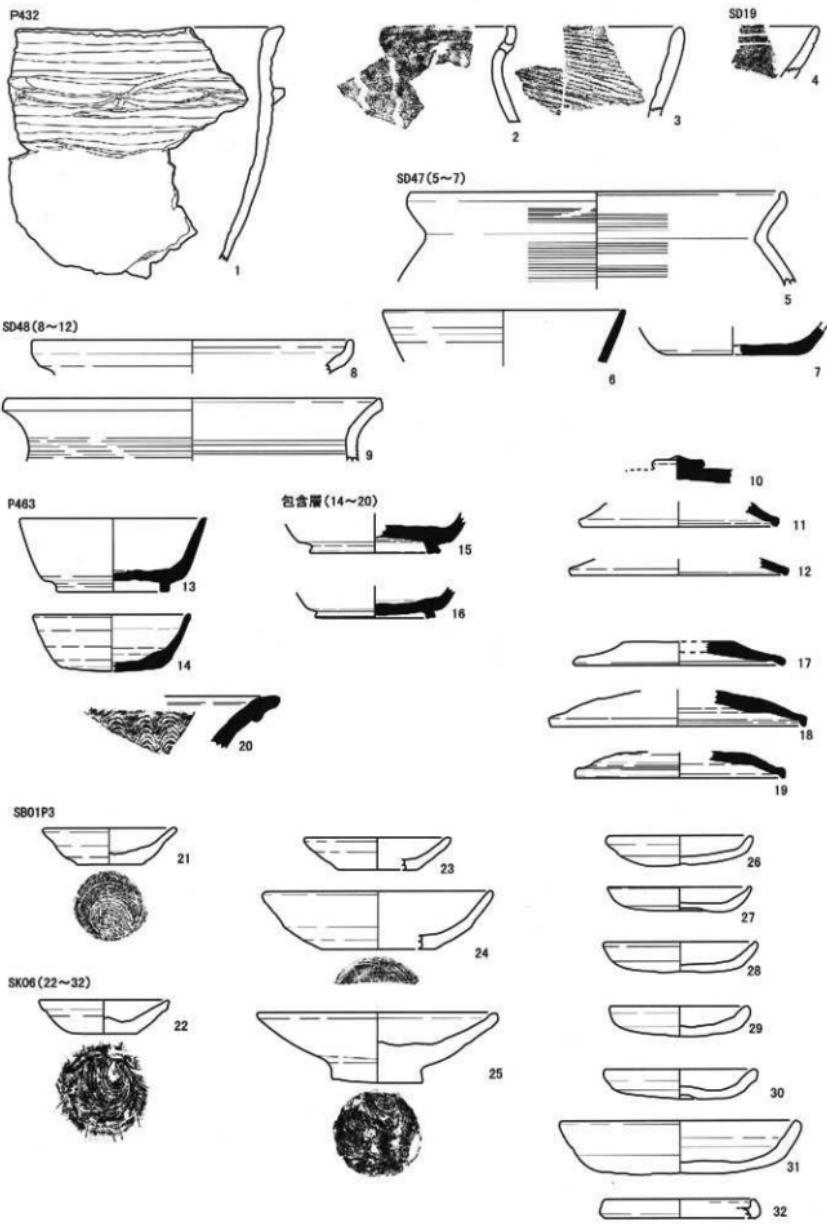
第8図 15地区の遺構(3) (1:60, SK19は1:80)



第9図 15地区の遺構(4) (1:80, SD24は1:60)

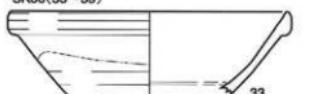


第10図 15地区の遺構(5)・16地区の遺構 (1:60, SB07は1:80)

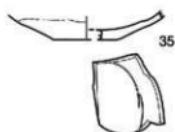


第11図 15地区の遺物(1) (1:3)

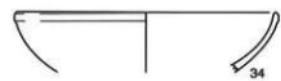
SK06(33~39)



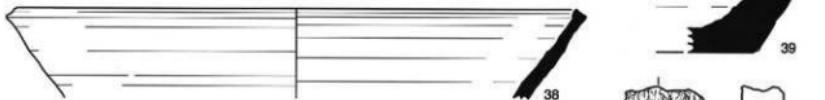
33



35



34



36

37



38



39

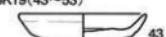


40

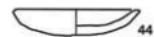


41

SK07(40,41)

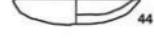


40



43

45



44

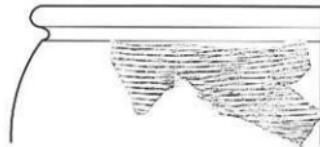
46



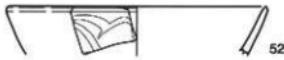
49

47

48



50

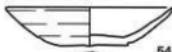


52

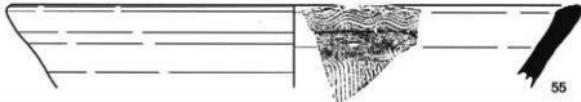


53

SK21(54, 55, 57)

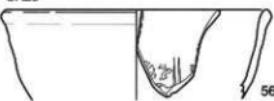


54

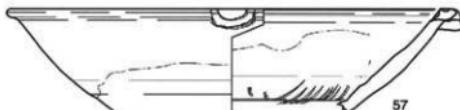


55

SK25



56

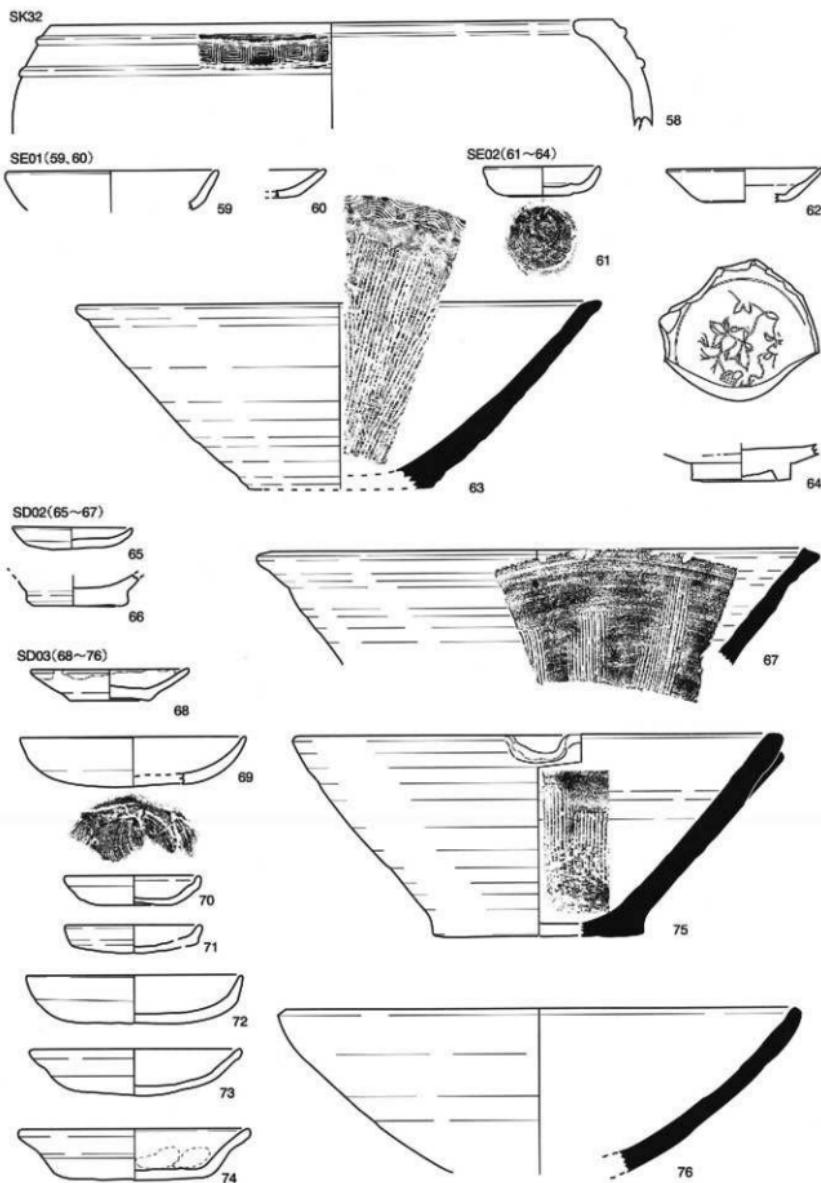


57

第12図 15地区の遺物(2) (49~51は1:4, そのほかは1:3)

0

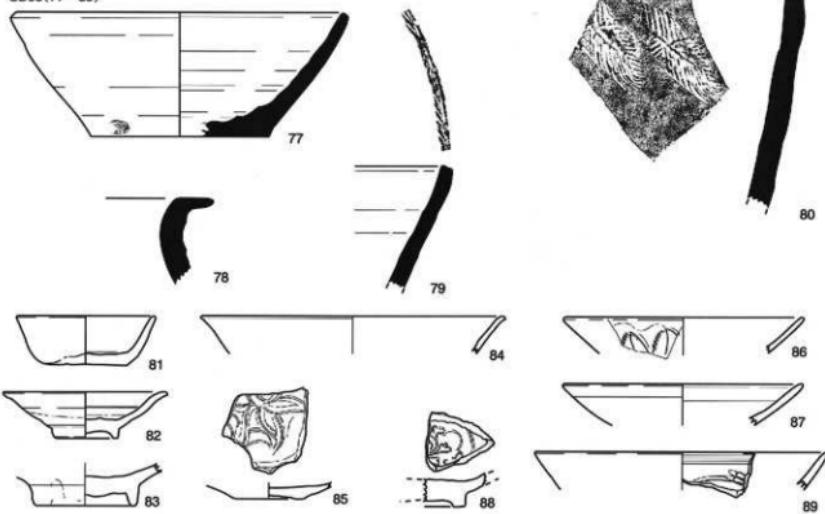
20cm



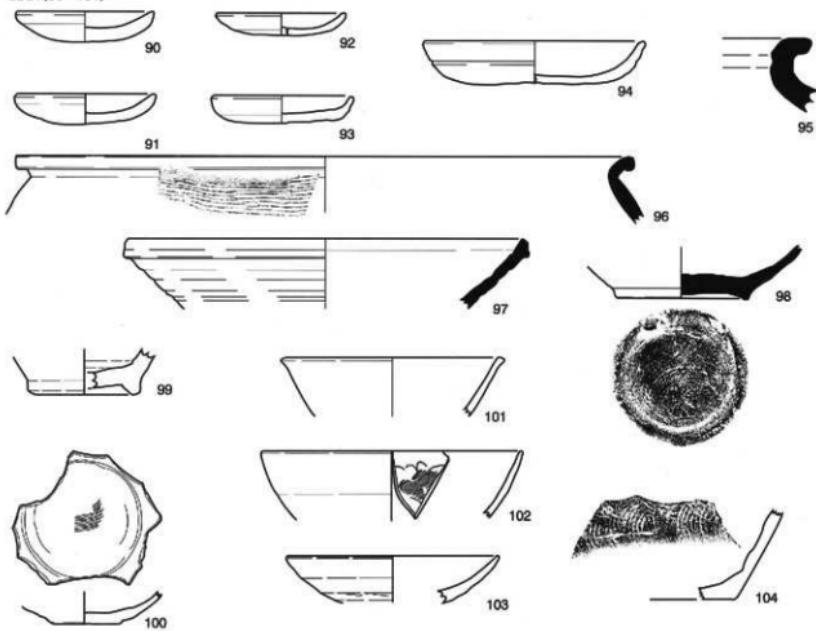
第13図 15地区の遺物(3) (63は1:4、そのほかは1:3)

0 20cm

SD03(77~89)



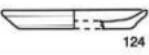
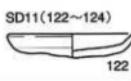
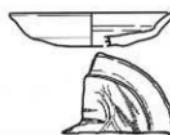
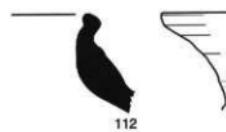
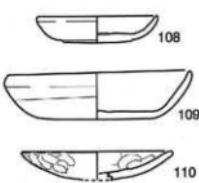
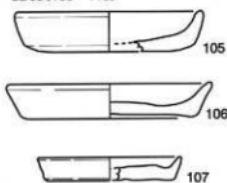
SD04(90~104)



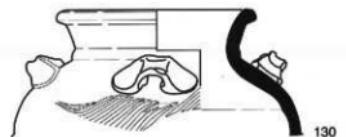
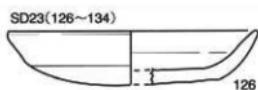
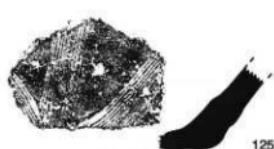
第14図 15地区の遺物(4) (80, 96は1:4, そのほかは1:3)



## SD09(105~118)

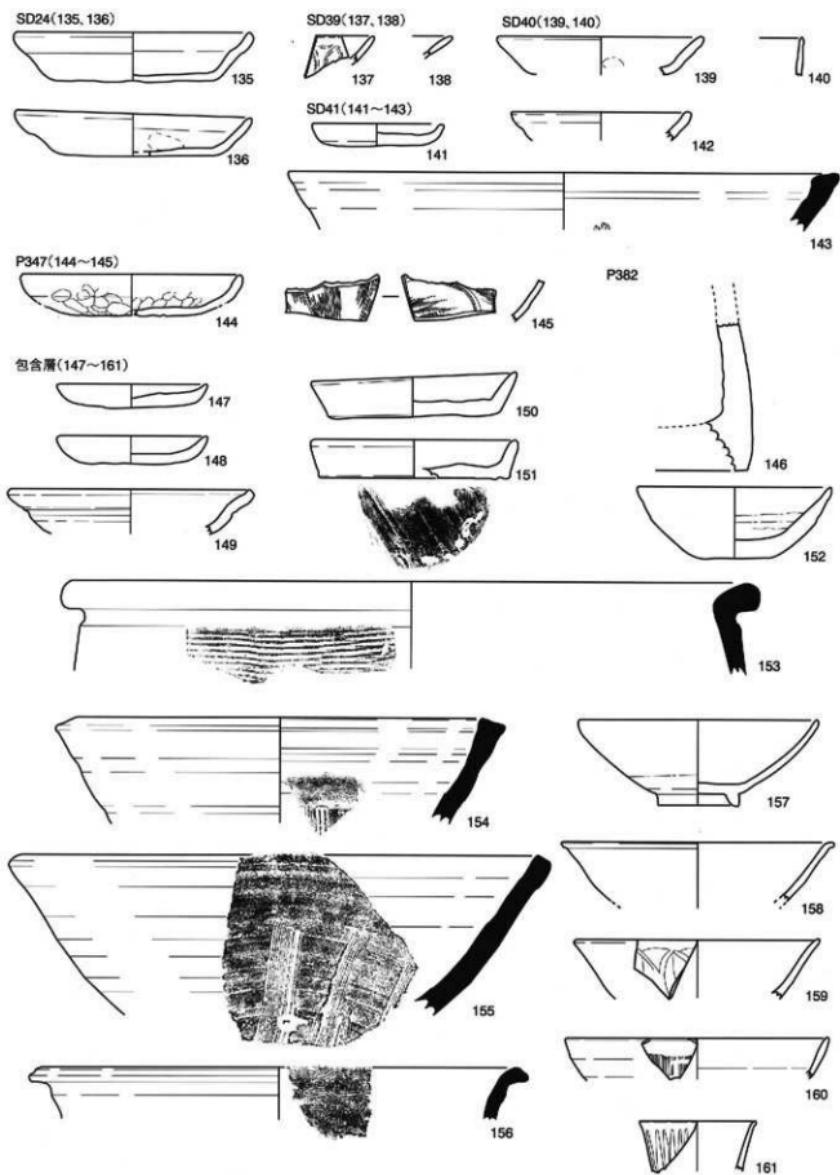


## SD10(119~121, 125)



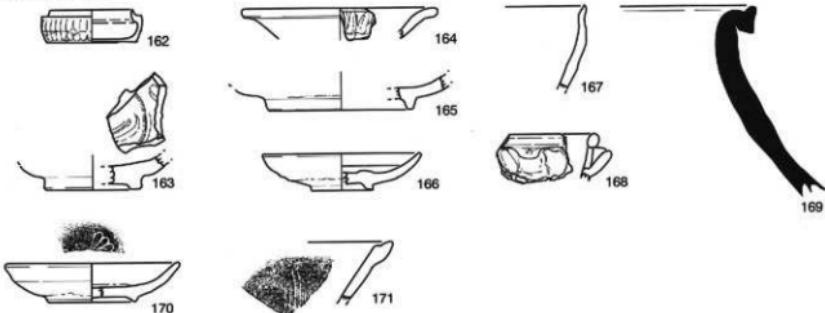
第15図 15地区の遺物(5) (131は1:4, そのほかは1:3)

0 20cm

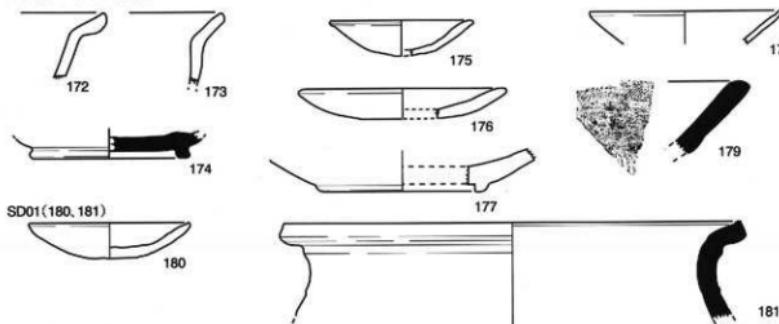


第16図 15地区の遺物(6) (1:3)

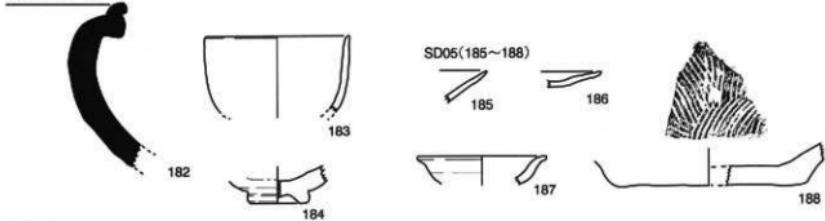
包含層(162~171)



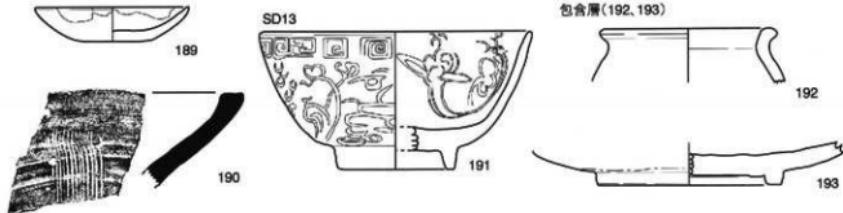
16地区 出土遺物



SD01(180, 181)

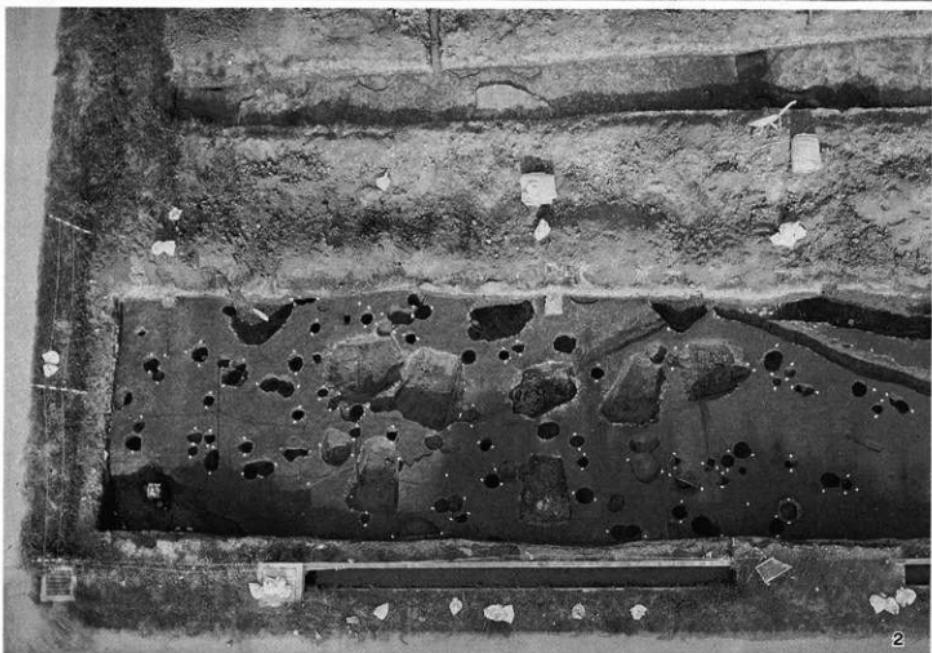


SD02(182~184)



0 20cm

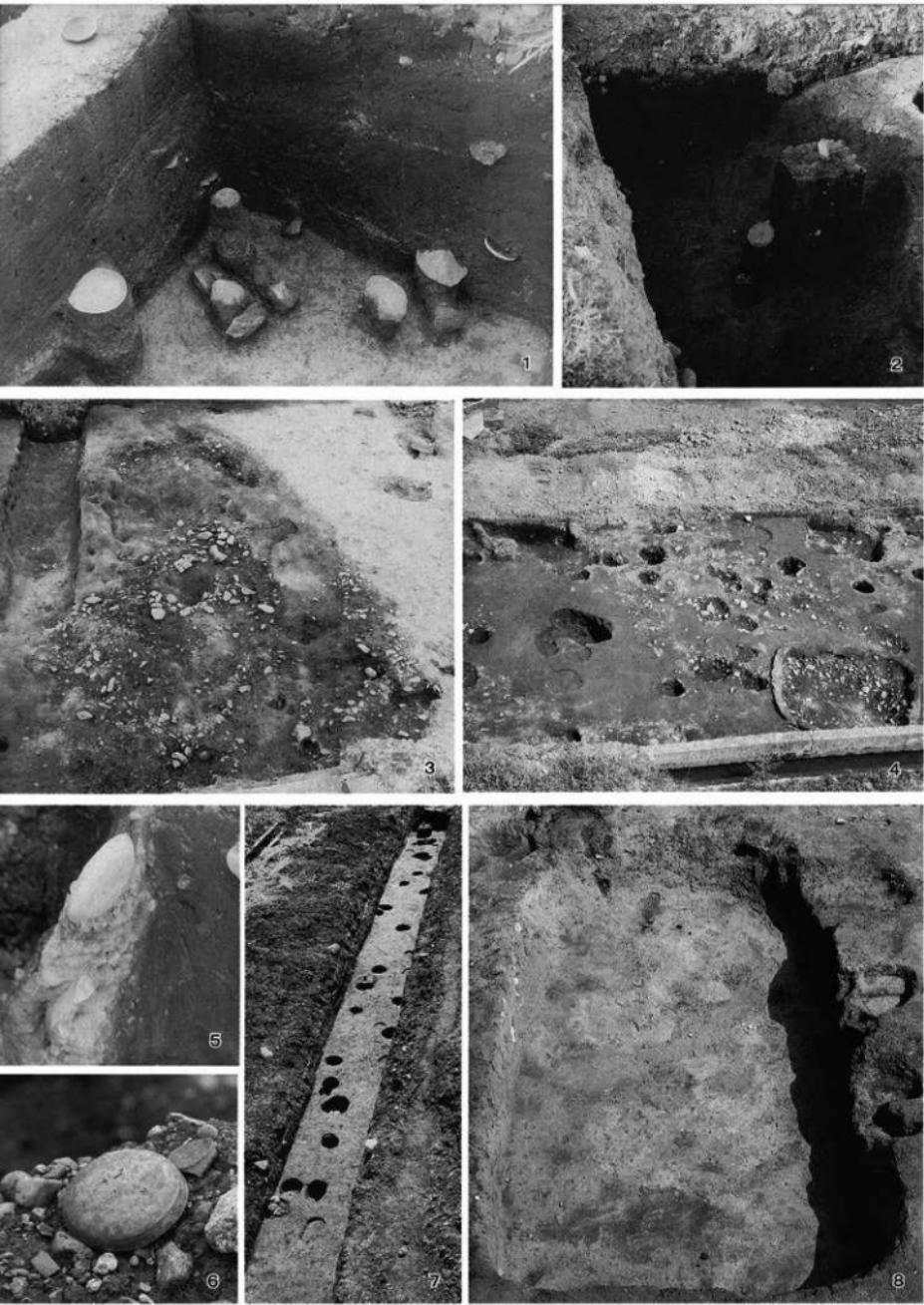
第17図 15地区の遺物(7)・16地区の遺物 (1:3)



図版1 15地区の遺構(1)

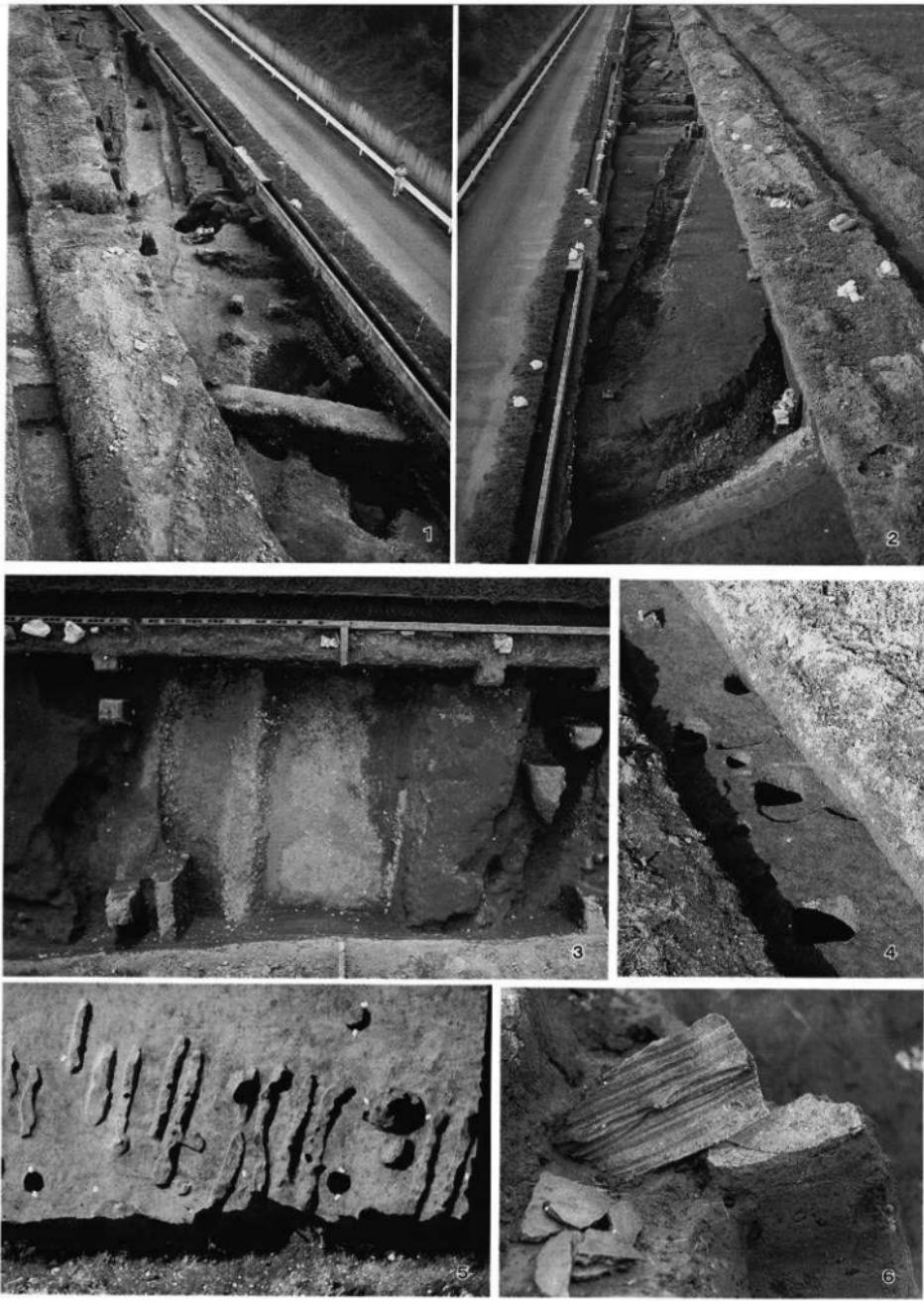
1. 調査区全景（北から）

2. SB01-02



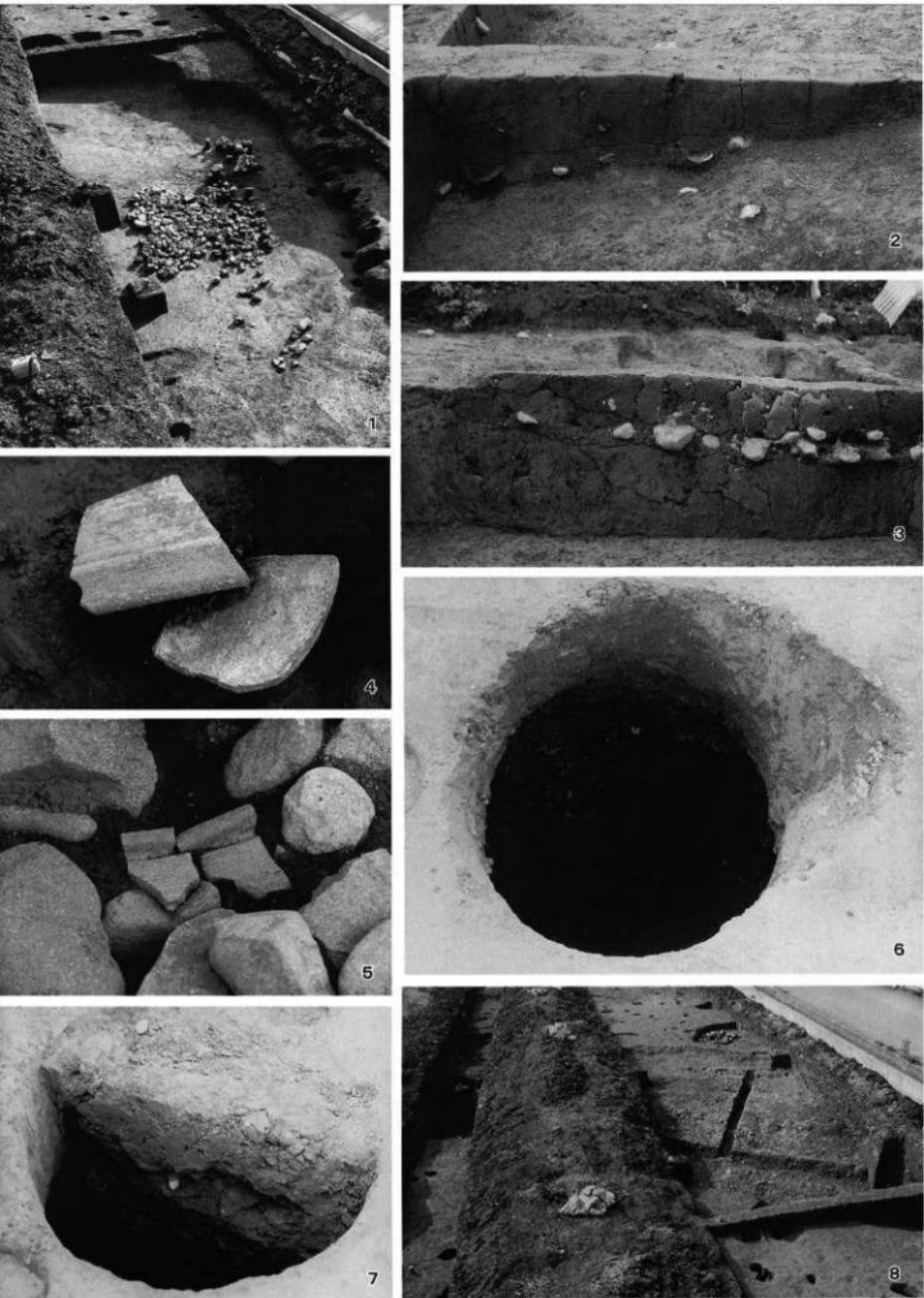
図版2 15地区の遺構(2)

1. SK06 遺物出土状況 2. SK06(南から) 3. SK11(西から) 4. SK04・05・07(西から)  
5. SK07 遺物出土状況 6. SD03 遺物出土状況 7. SA03(北から) 8. SK10(南から)



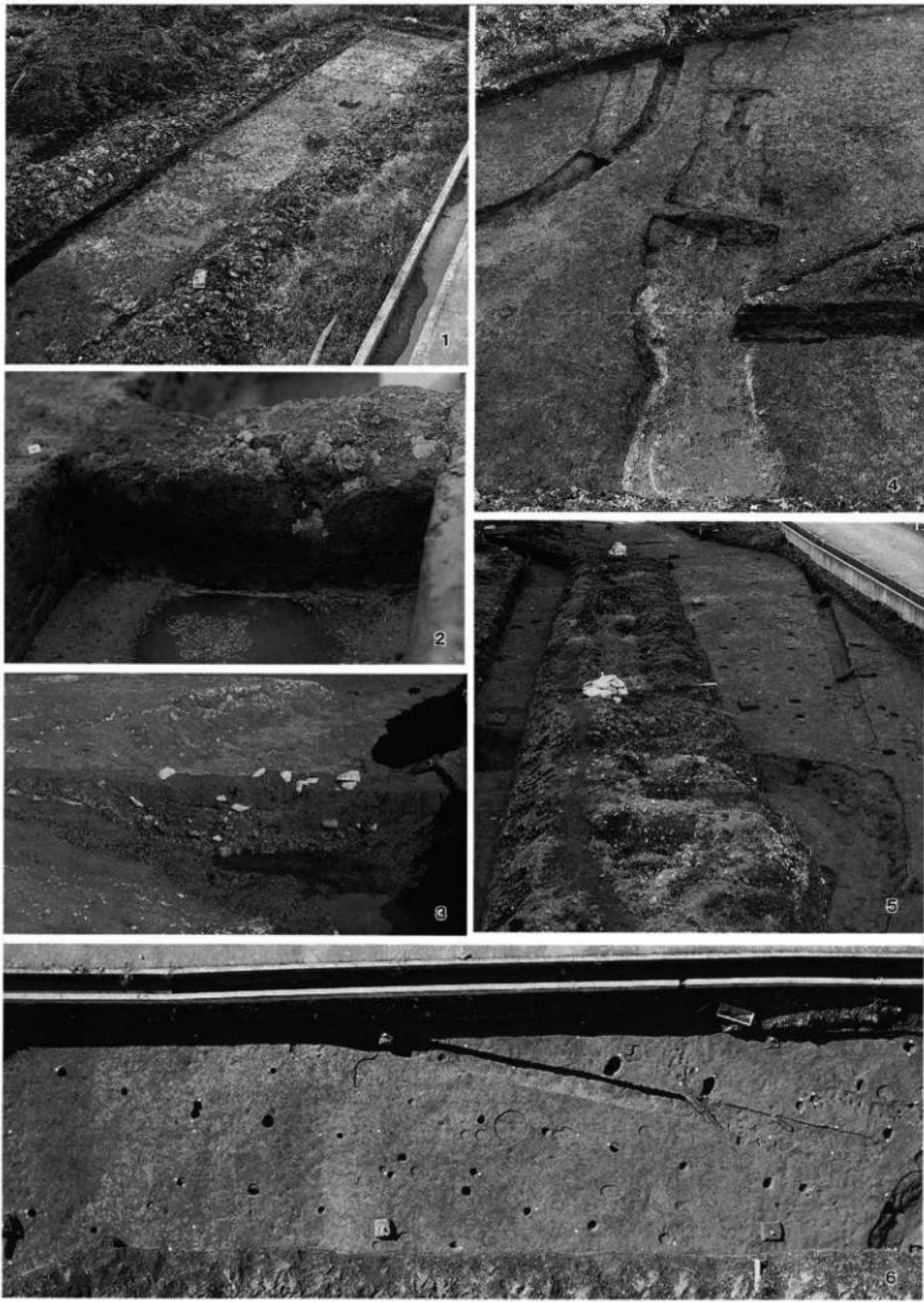
図版3 15地区の遺構(3)

1. SD03・04(北から) 2. SD01・02(南から) 3. SD09・10・11  
 4. P379・P418・P378(南から)  
 5. SX01 6. P432 遺物出土状況



図版4 15地区の遺構(4)

1. SK19(北から) 2, 3. SK19 土層 4, 5. SK19 遺物出土状況 6. SE02 7. SE03  
8. SD23(北から)



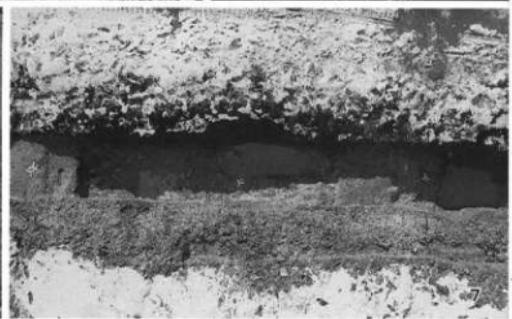
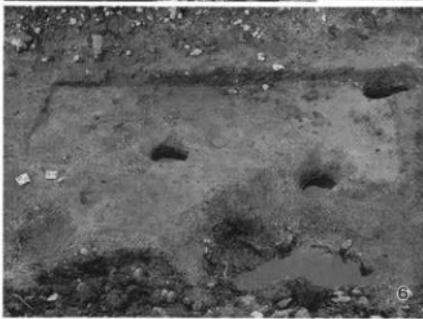
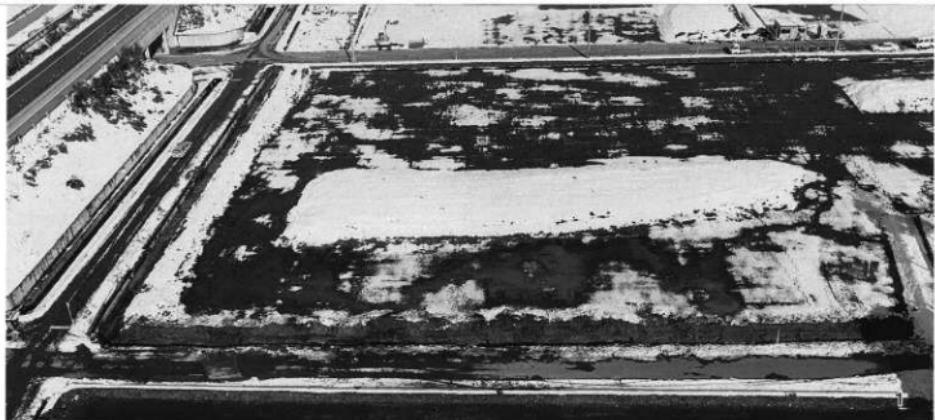
図版5 15地区の遺構(5)

1. X2～15付近(北から) 2. SD24土層 3. SD25土層 4. SD27(西から)  
5. SD25：SB05・06(北から) 6. SB05・06



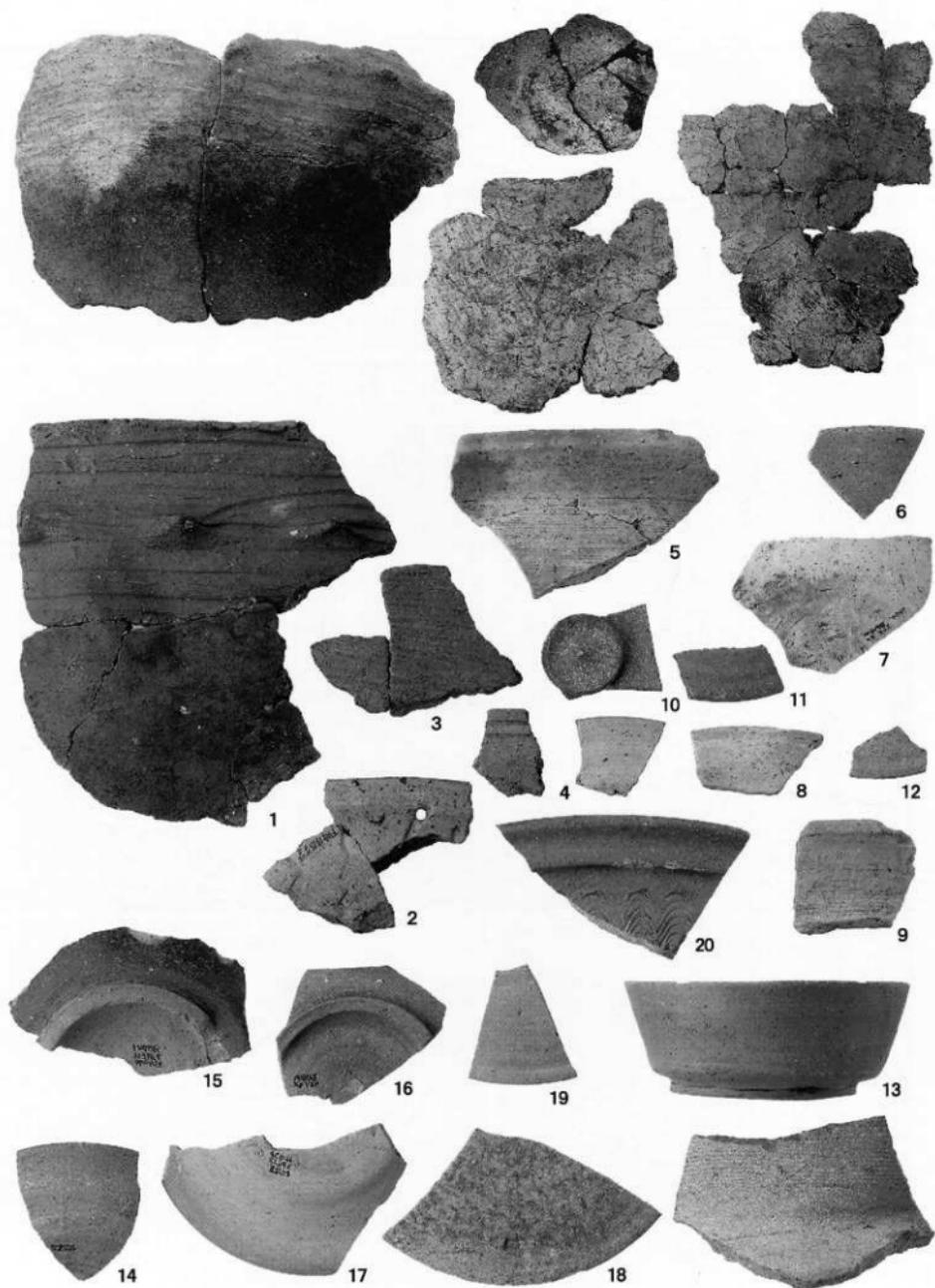
図版6 15地区の遺構(6)

- 1. X6～21, Y1～62.5付近(東から)
- 2. Y11から東部分(西から)
- 3. SD47・48(北から)
- 4. 繩文土器出土状況
- 5. SB07
- 6. 作業状況

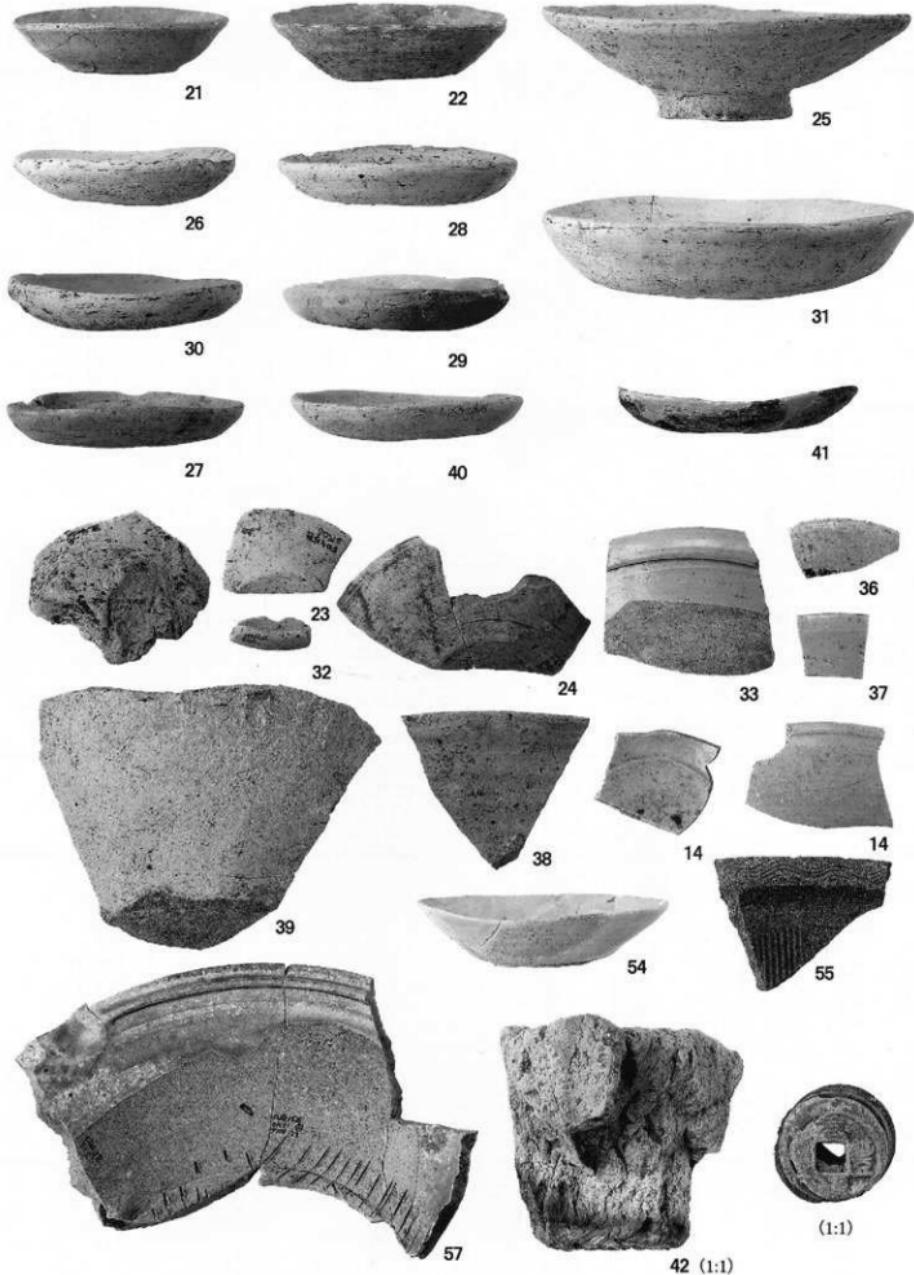


図版7 16地区の遺構

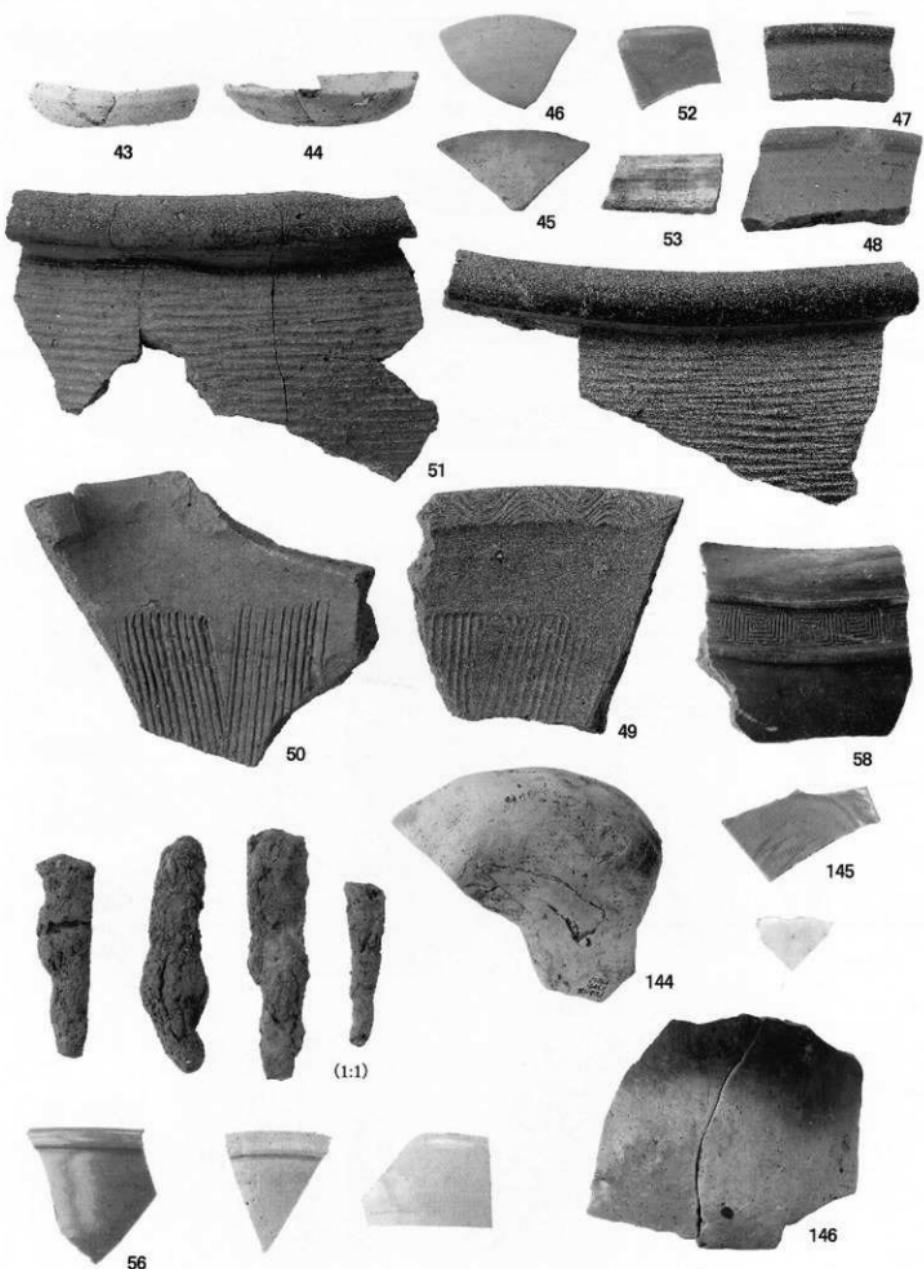
1. 調査区全景(南から) 2. 調査区南北方向(南から) 3. 調査区東西方向(東から) 4. SE03・04  
5. 作業状況 6. SK01(南から) 7. SD01・02



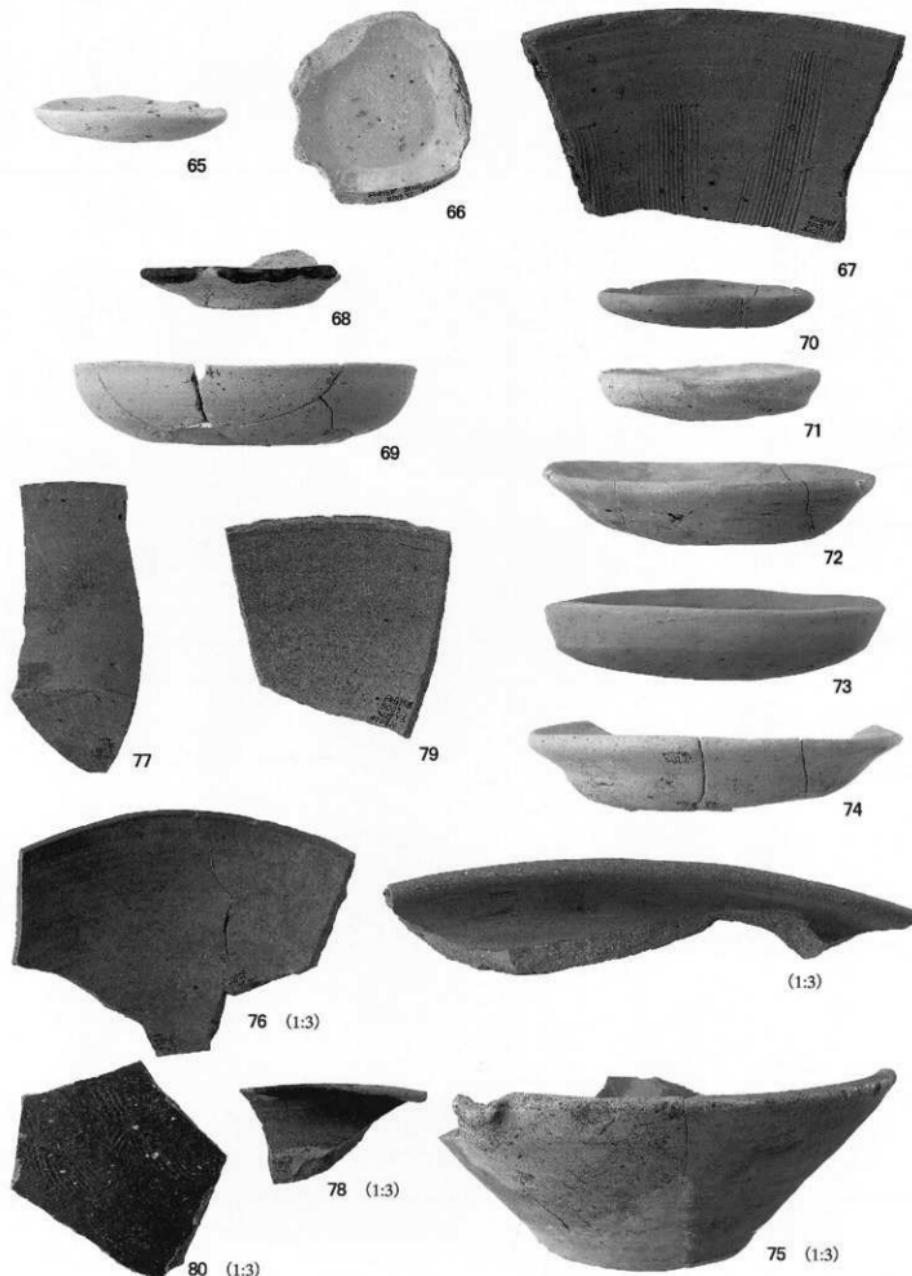
图版 8 15 地区出土遗物(1) (1 : 2)



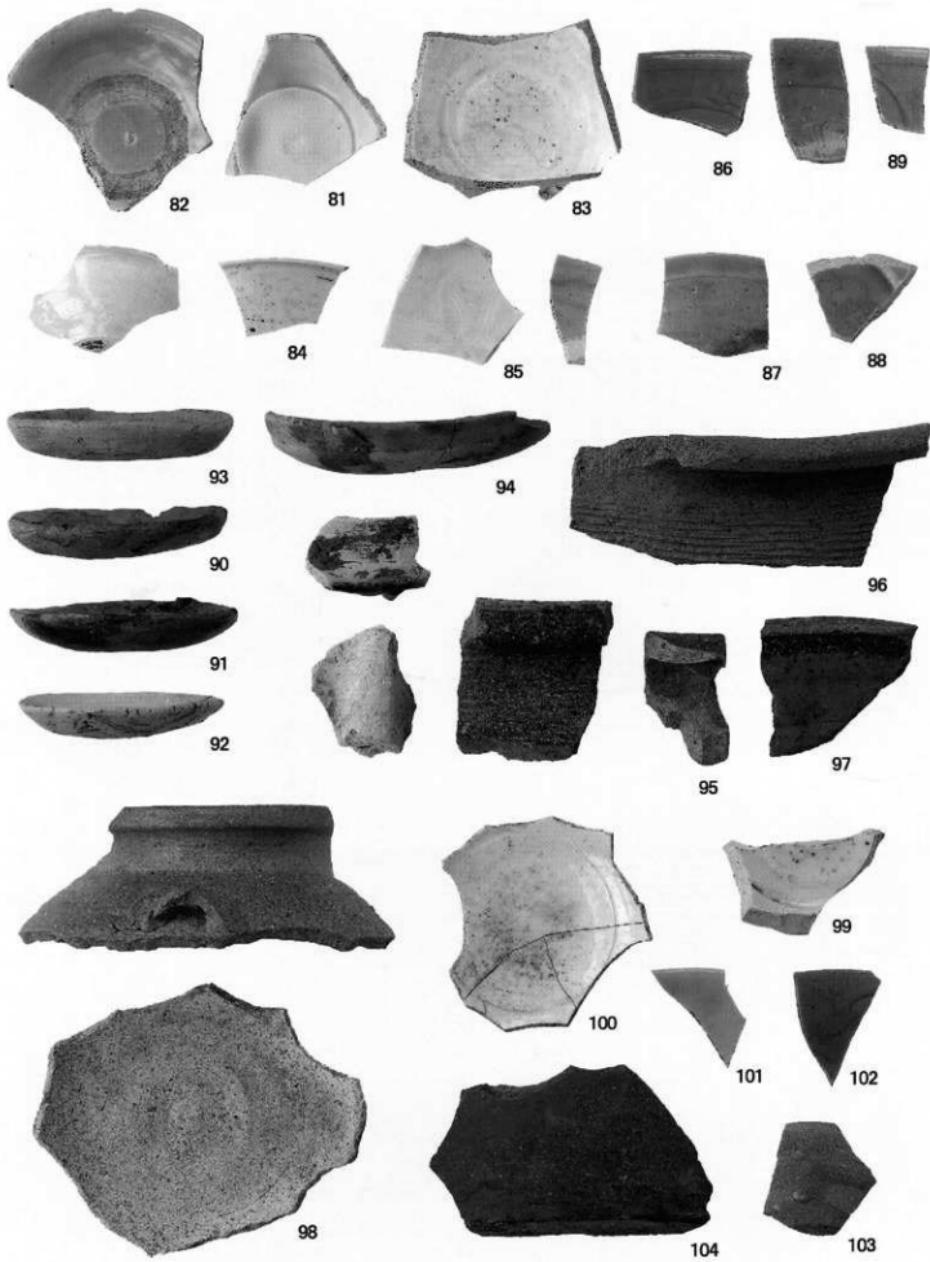
图版 9 15 地区出土遗物(2) (1 : 2)



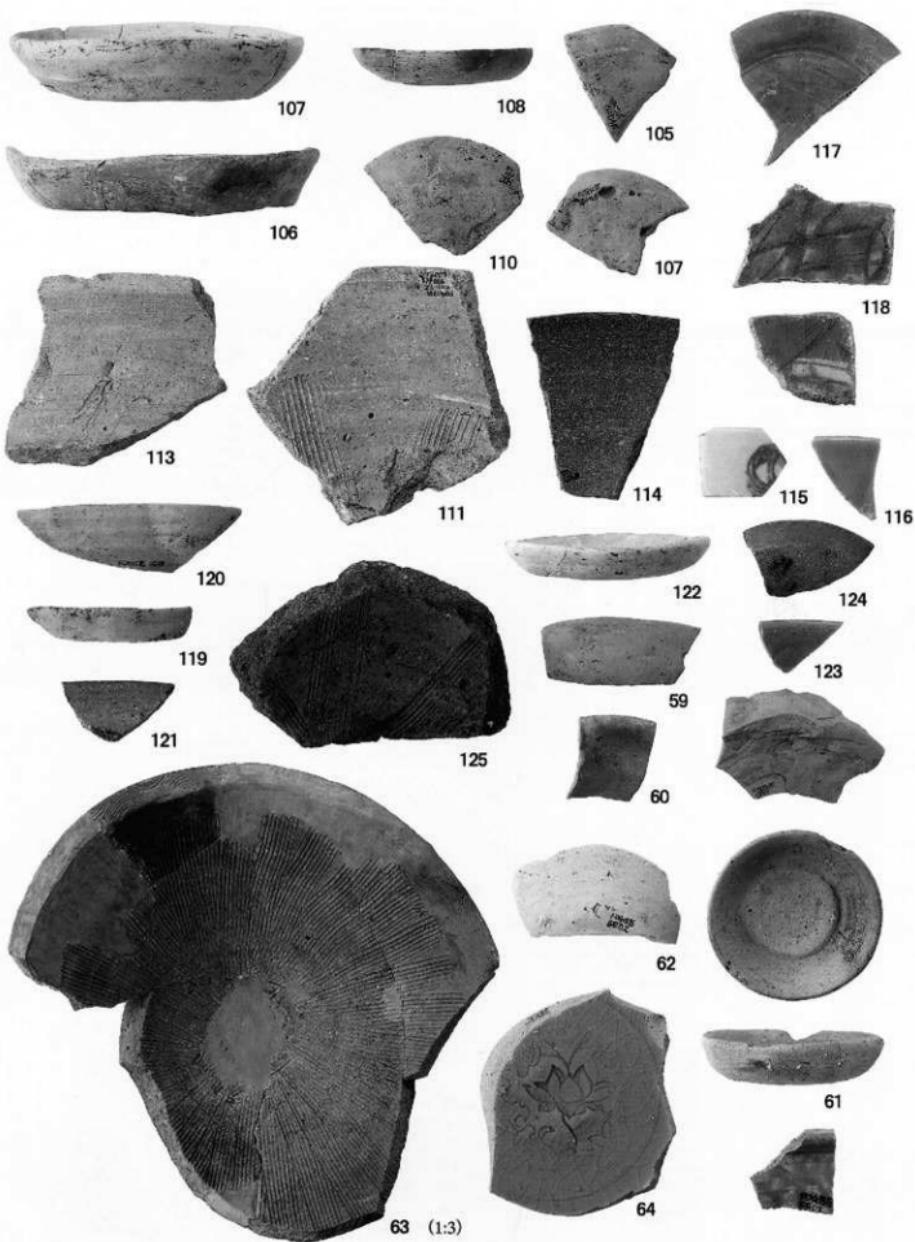
图版 10 15 地区出土遗物(3) (1 : 2)



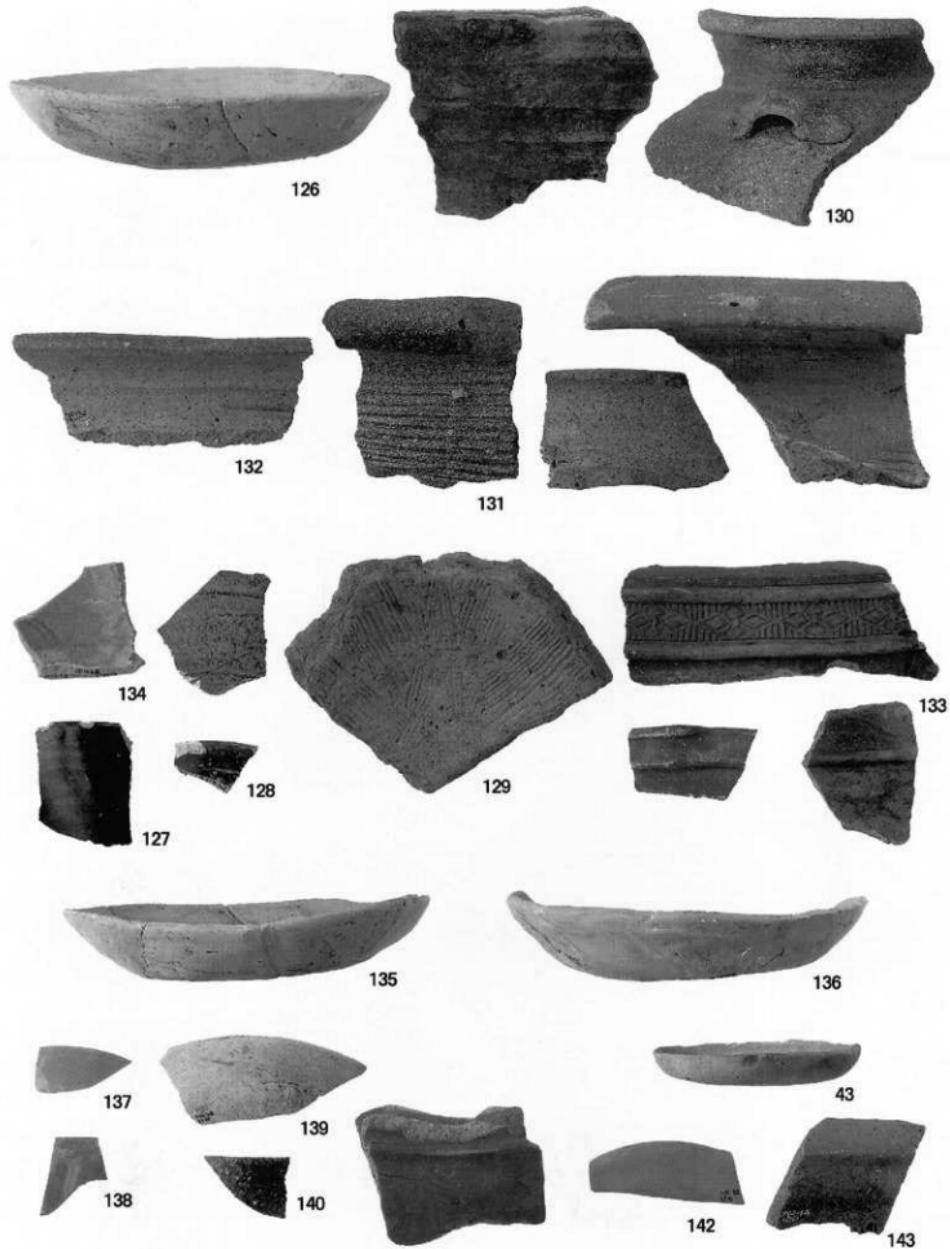
图版 11 15 地区出土遗物(4) (1 : 2)



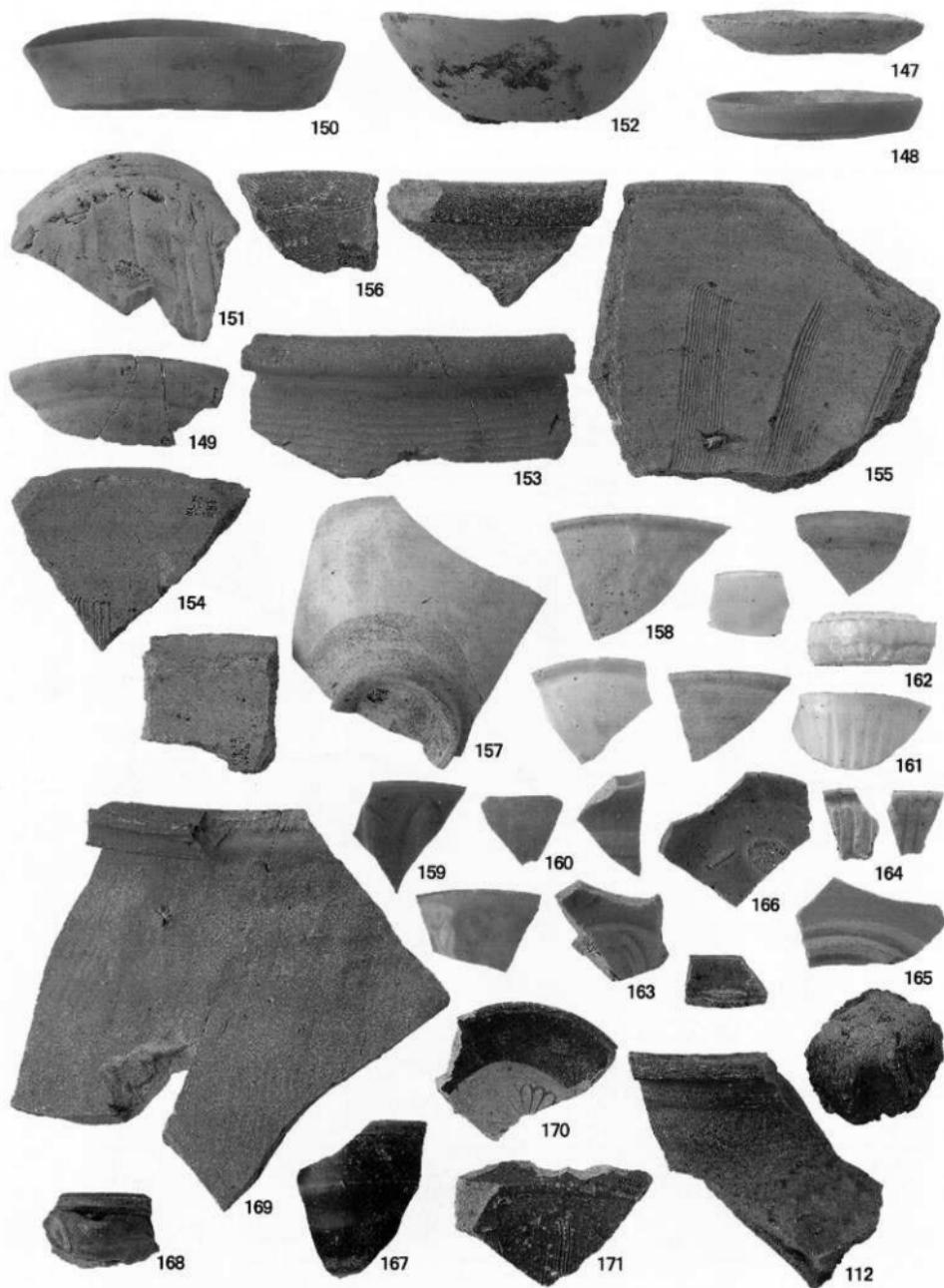
図版 12 15 地区出土遺物(5) (1 : 2)



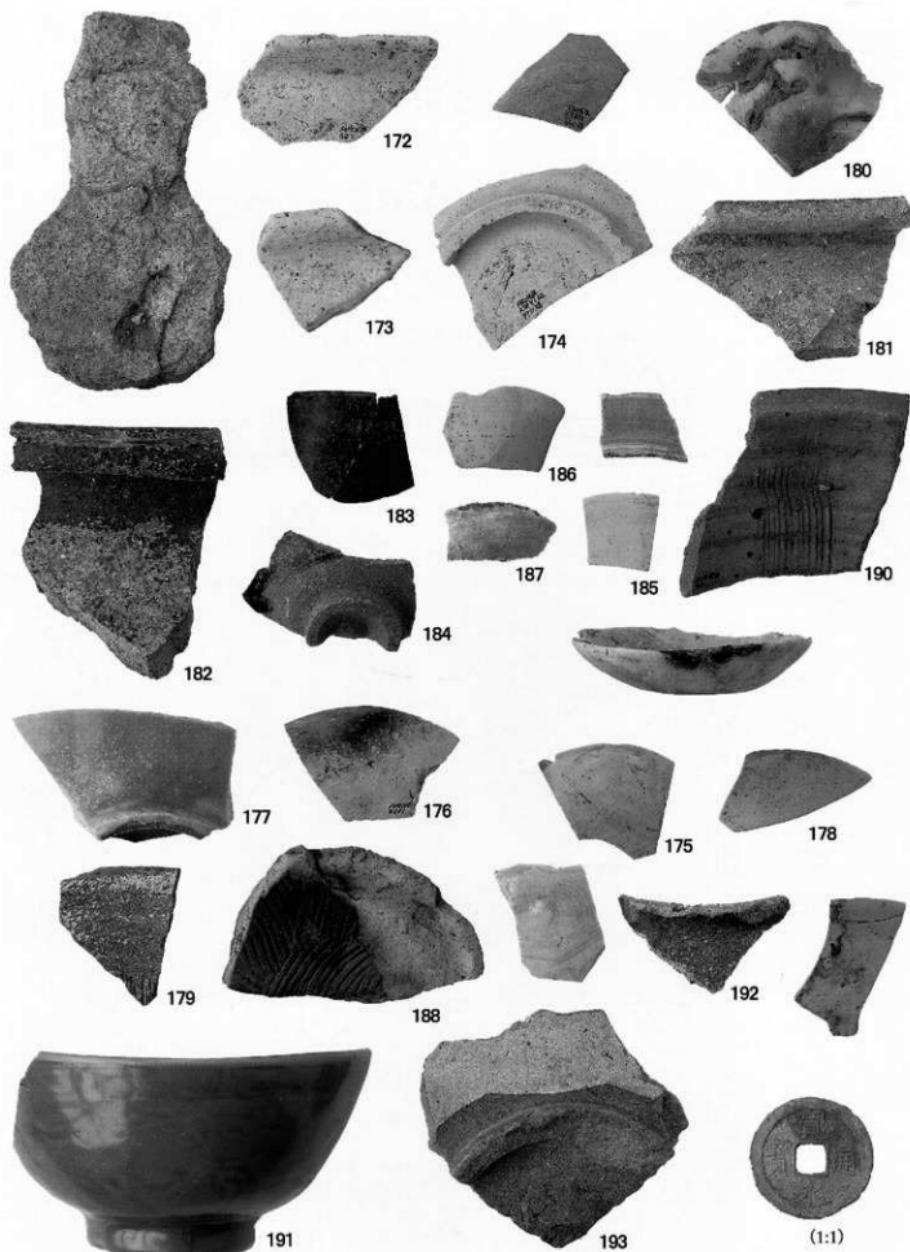
图版 13 15 地区出土遗物(6) (1 : 2)



图版 14 15 地区出土遗物(7) (1 : 2)



图版 15 15 地区出土遗物(8) (1 : 2)



图版 16 16 地区出土遗物 (1 : 2)

## 報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまちうめはらごまどういせきに						
書名	富山県福光町梅原胡摩堂遺跡II						
副書名	県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（梅原地区）に伴う 埋蔵文化財包藏地の発掘調査報告(8)						
編著者名	佐藤聖子						
編集機関	福光町教育委員会						
所在地	〒939-1692 富山県西砺波郡福光町荒木1550 TEL (0763) 52-1111						
発行年月日	西暦1998年3月20日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 ...	東経 ...	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
梅原胡摩堂	富山県 福光町梅原	16421	36度33分 20秒	136度54分 20秒	970513 ～971209	3,415m <sup>2</sup>	県営ほ場 整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
梅原胡摩堂	集落	縄文時代 奈良・平安時代 中世、近世	土坑 島跡、溝、ピット 掘立柱建物、土坑、 井戸、溝、ピット	縄文土器、打製石斧 土師器、須恵器 中世土器、珠洲、青磁、 白磁、青白磁、瀬戸美濃、 越前、越中瀬戸、八尾、 瓦器、土師質土器、唐津、 マイゴ羽口、錢			

県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（梅原地区）  
に伴う埋蔵文化財包藏地の発掘調査報告(8)

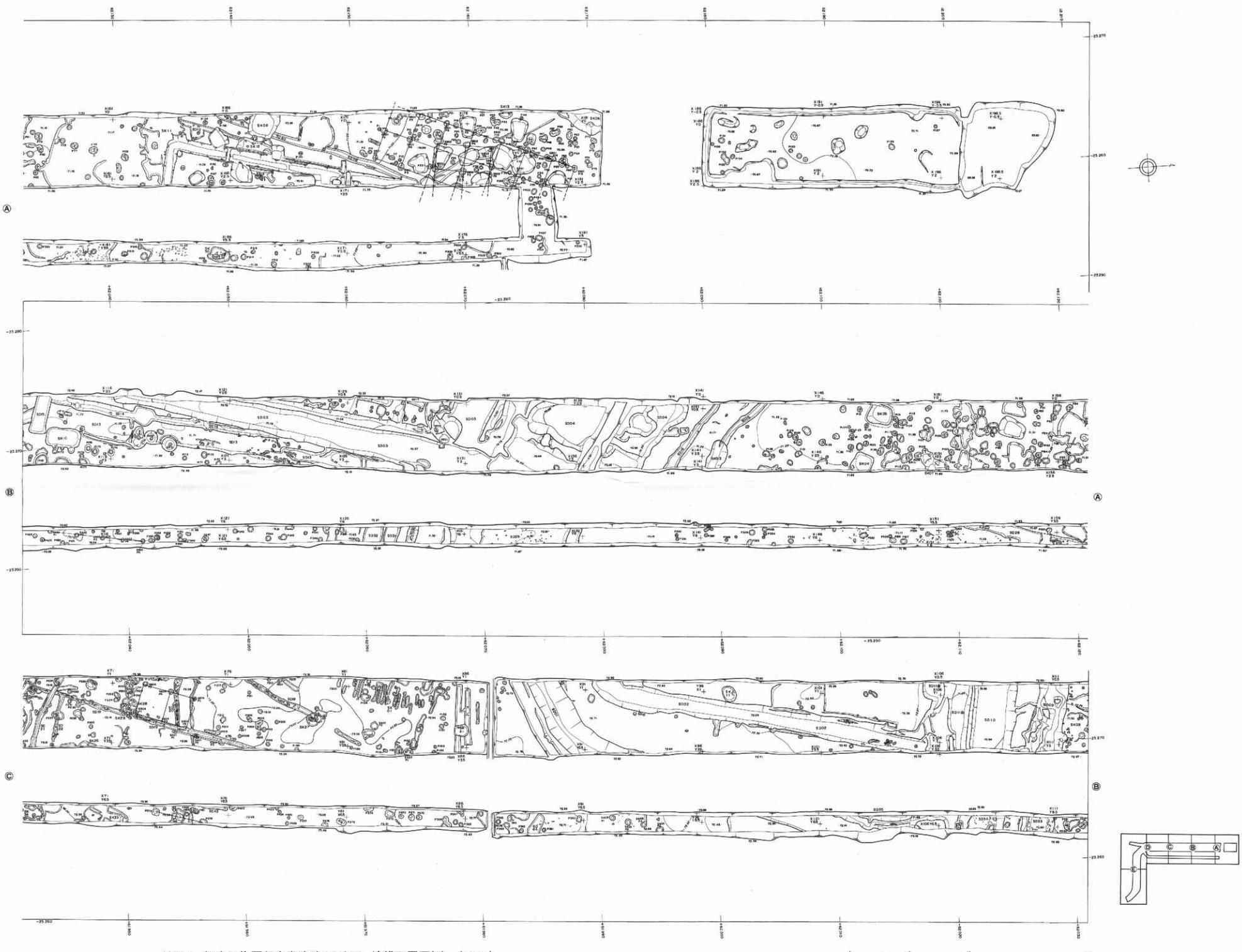
### 富山県福光町梅原胡摩堂遺跡II

平成10年3月20日

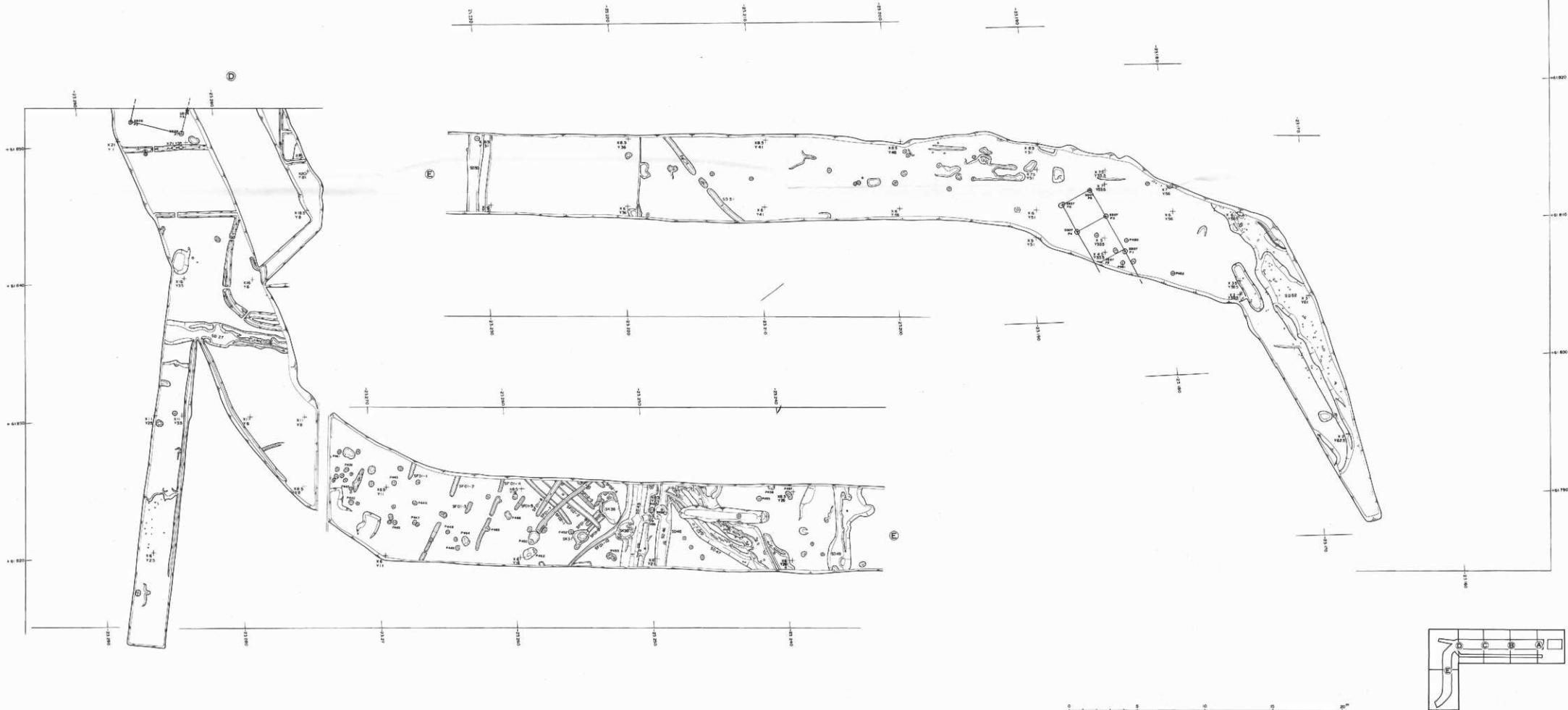
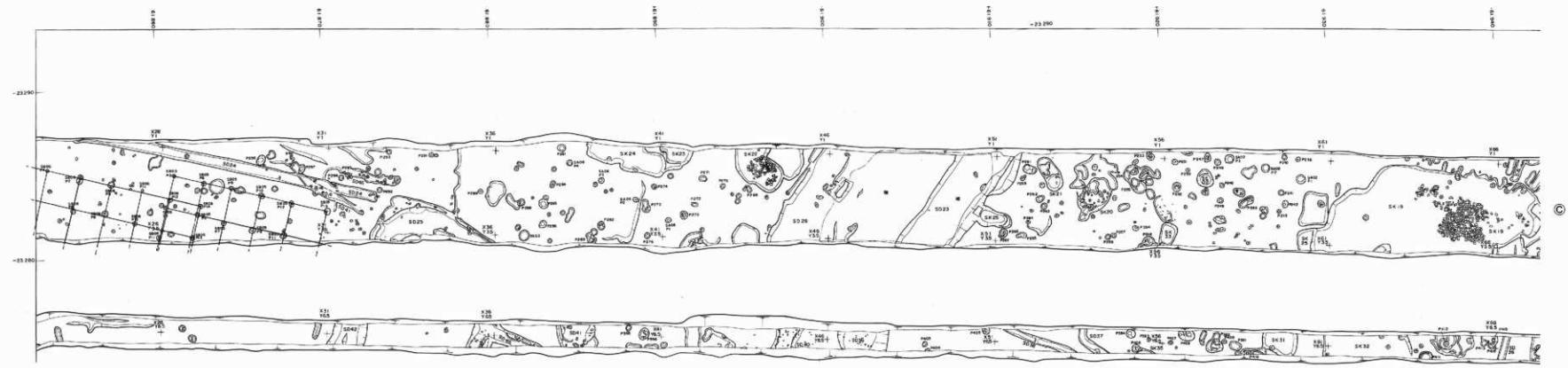
編集 福光町教育委員会  
富山県埋蔵文化財センター

発行 福光町教育委員会

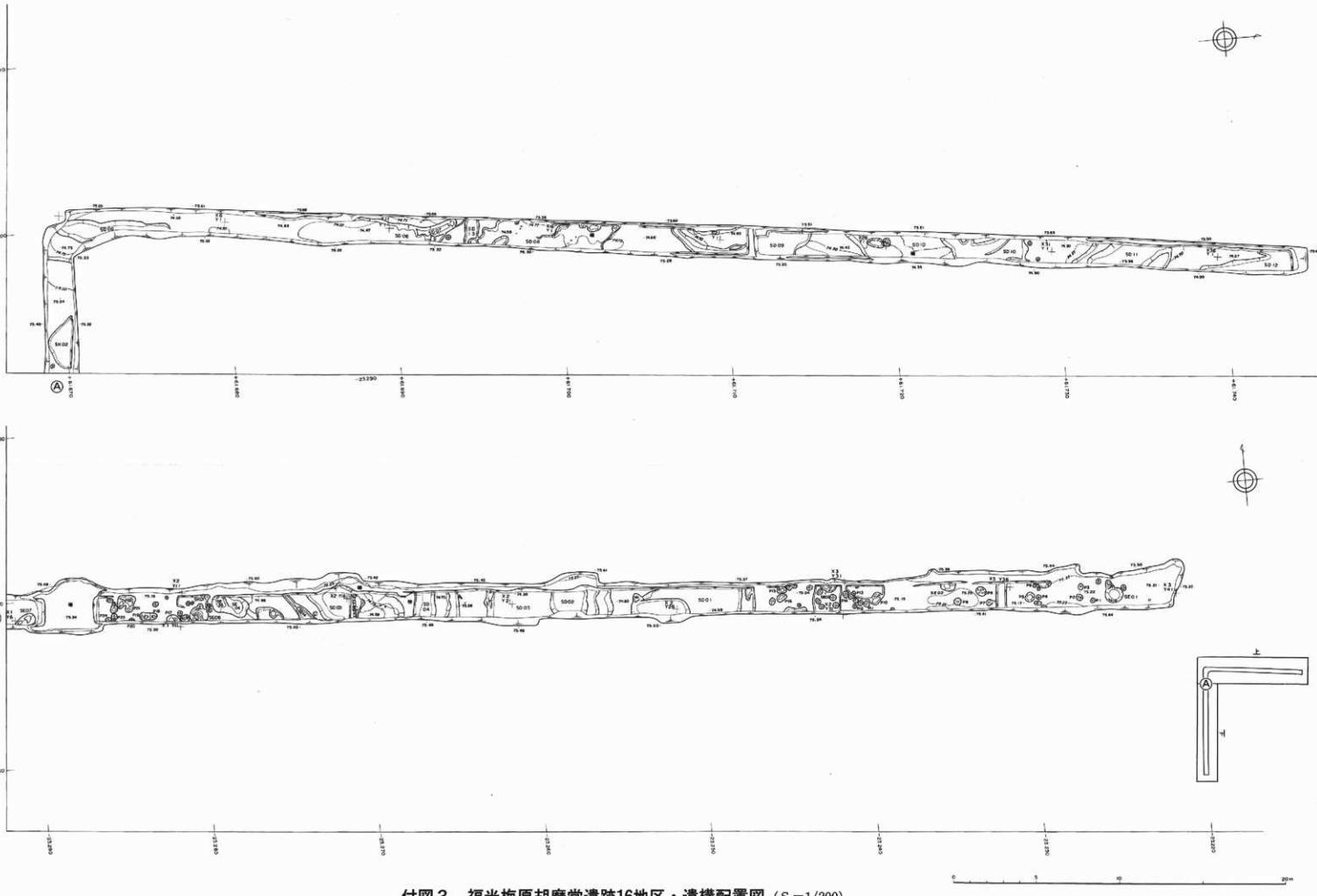
印刷 (株)ナカグ印刷



付図1 福光町梅原胡麻堂遺跡15地区・遺構配置図(1) (1:200)



付図2 梅原胡摩堂遺跡15地区・遺構配置図(2) (1:200)



付図3 福光梅原胡摩堂遺跡16地区・遺構配置図 (S=1/200)

